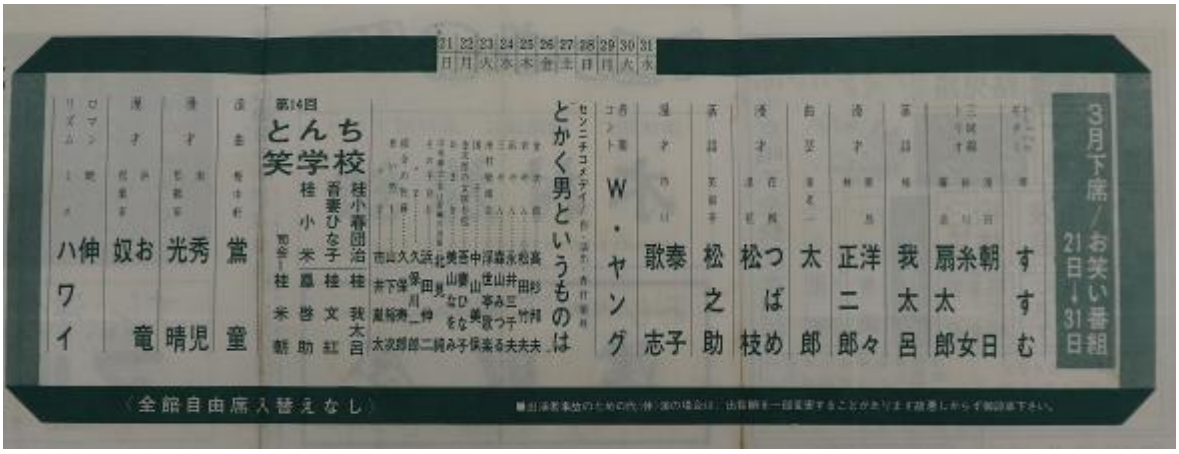
令和２年度　年報



大阪府立上方演芸資料館／ワッハ上方

目　次

１　ごあいさつ ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ １

２　私が見てきた漫才の形　寄稿　大池　晶

（運営懇話会殿堂入り部会委員、関西演芸作家協会副会長、漫才作家）＿＿＿＿＿ ２

３　上方演芸資料館運営状況（令和２年度）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 10

４　収蔵資料の紹介

三代目旭堂南陵襲名記念　額「寄席鍋」について　荻田　清

（運営懇話会資料整理・活用部会長、梅花女子大学名誉教授）＿＿＿＿＿＿＿＿18

砂川捨丸の SP レコード―府立上方演芸資料館所蔵盤について　大西　秀紀

（運営懇話会資料整理・活用部会委員）

（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）＿＿＿＿＿＿＿＿ 21

５　展示資料の紹介、資料整理（資料整理の現場から）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 28

６　上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 39

【表紙の写真】

千日劇場プログラム(**上**:**昭和** 40(1965)**年３月下席　中面の一部**)

令和元年に寄贈され、令和２年度に登録作業が完了した資料。

千日劇場は、昭和33(1958)年から昭和44(1969)年まで、大阪市南区難波新地(現 大阪市中央区千日前２丁目)の千日デパートの６階にあった。

上の写真はプログラム中面の一部を撮影したもので、令和元年度(第23回)の上方演芸の殿堂入り名人、笑福亭松之助とWヤングの名前が記されている(新型コロナウイルス感染拡大防止のため、表彰式は令和２年度に開催した)。

千日劇場のプログラムには、両名のほかにも歴代の上方演芸の殿堂入り名人の名前が見られる。

ごあいさつ

大阪府立上方演芸資料館（ワッハ上方）は、砂川捨丸氏の遺族から氏が60年以上愛用された鼓の寄贈を受けたことを契機に平成８年11月に開館し、本年11月で25周年の節目を迎えます。この間、資料館の運営にご支援、ご協力を賜りましたすべての方々に心から感謝申し上げます。

令和２年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、当館も、臨時休館や企画イベントの休止など、活動制限を余儀なくされましたが、多くの方々のご協力のもと開催しました企画展や特別展を通じて、世代を問わず多くの方々に上方演芸の魅力を体感いただいたところです。

依然として、新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない中ではありますが、利用者の安全、安心を第一に考慮しつつ、引き続き上方演芸に親しんでいただける機会を提供できるよう、効果的な情報発信にも努めてまいりたいと考えております。

資料館の使命は、上方演芸の発祥から現在に至るまでの歴史を多くの方々に伝えることにあります。このため、資料をより多くの方々に活用いただけるようデジタル化を進めるとともに、収蔵資料を活用した取組みを引き続き進めてまいります。こうした取組みの一環として、本年４月には、演芸史、児童書、展示に関連した図書などをご覧いただける「図書閲覧コーナー」を新たに設置するとともに、ホームページでも一覧をご案内しています。皆様方のご利用お待ちしております。

今後とも、資料館がより多くの方々に愛され、親しまれますとともに、「笑い」という大阪が誇る地域文化を広く発信できるよう努めてまいりますので、関係者の皆様方には一層のお力添えをお願い申し上げます。

結びに、本年報を通じて、皆様方が上方演芸についてのご理解を深めていただくことができれば、幸いに存じます。

令和３年１１月　　館長　佐藤　謙一

私が見てきた漫才の形

大池　晶
(殿堂入り部会委員)
(関西演芸作家協会副会長、漫才作家)

いきなり私ごとで恐縮ですが、先日 70 歳の誕生日を迎えました。いわゆる古希である。我が家にテレビが来たのが小学１年生・６歳の時、当時の番組は古い映画やプロレス、野球(殆ど巨人戦～それで当時の子供は巨人ファンになった)、大相撲の中継は NHK の他、数局の民放が同時中継していた。そしてお笑い番組であるが、中田ダイマル・ラケット、森光子の「びっくり捕物帖」や横山エンタツ、大村崑、佐々十郎の「やりくりアパート」の記憶が鮮明に残っている。ササやん・崑ちゃんの「ミゼット！」の CM をリアルタイムで見てきた人間です(何の自慢にもなりませんが)。演芸番組も結構多くあってスタジオやホール、それに道頓堀・角座からの「道頓堀アワー」等の漫才中継を、親がお笑い好きだったのか欠かさず見ていたのが漫才と私の出合いで以降六十余年の付き合いの始まりです。

小・中・高を通して実際に演芸場で生の漫才を見た経験は２度しかなくテレビ・ラジオが中心で、今では考えられない事ですが月曜から金曜迄の夕方６時台に複数の民放が帯で演芸番組を放送してました。それも 30 分で出演は２組、つまり１組の持ち時間は 13 分強(今より CM も少なかった)、それが演芸番組の定番でした。

高校を卒業して勤めた会社の配属先がシフト勤務で月に 10 回の宿直がベース、午前 11 時に出勤して翌日 11 時迄の拘束(途中仮眠と食事休憩時間が計８時間 30 分)。シフトに関わらない後の日は代休、有休で完全オフと非常に余暇時間に恵まれた職場で、休みの日以外に宿直明けで午前 11 時に仕事が終わった後は昼前から開いている角座、梅田、なんばの花月、梅田のトップホットシアター、新世界新花月の各演芸場に足を向けるようになったのは当然の成り行きでした。尚、余談ですが私が勤務していた職場、１回宿直すると５時間半の時間外と宿直手当が支給されると言う好待遇でしたが当然のことながらその会社は今はありません。

こうして私は漫才をテレビ・ラジオでなく劇場のお客の立場で見るようになりました。又、当時は高島屋や三越の百貨店のホールで若手落語会が無料で開かれており、そちらの方にも足を運ぶようになり島之内教会で島之内寄席が開かれる頃にはあらゆる落語会の常連客となっていました。以来、落語鑑賞は趣味として続け今も月に数回は天満天神繁昌亭等に出かけています。趣味とは言いながら落語鑑賞は後に関わる漫才台本創作に大いに助けになっています。

昭和 50 年２月映画・演劇の脚本家を養成する「大阪シナリオ学校」が、当時人気が下降気味だった漫才の作家を育成の為、漫才作者・秋田實を名誉校長に招き「演芸・喜劇台本科」を創設、第１期生として入学したのとシフト職場から離れ９時から５時の勤務に就いたのがほぼ同時でした。因みに同時に入学したのは 47 名、その後の入学希望がほぼ一桁なのを見るとその時期私のような潜在的な漫才作家志望者が多くいた事がよく分かります。同期生で放送作家の古川嘉一郎や高見孔二がいました。当時の講師は秋田名誉校長の他、織田正吉、足立克己の現役の漫才作家の

他、NHK の熊谷富夫、朝日放送の狛林利男らの放送局の演芸担当に、木津川計らの文化人、特別講師に桂枝雀ら各界一線で活躍する人ばかり、あっと言う間に１年が過ぎて卒業を迎えます。

と同時に、秋田實が前年に読売テレビの協力を得て発足した漫才の勉強会「笑の会」に加入する事ができました。「笑の会」は若手の作家が書いた作品を若手の演者がお客さんのいる会場で演じる勉強会で発足当時の主なメンバーは B&B、ザ・ぼんち、海原はるか・かなた、作家は中田明成、楠畑正史、吉田清らでした。その年の８月、新しく参加したオール阪神巨人と森啓二・喜多洋司の台本が採用され作家デビュー、25 歳になったばかりでした。ただし、当時は勉強会と言う性質上ノーギャラでした。とは言えこの日から創り手側の立場で漫才と付き合う事になりました。

翌年、秋田先生がなくなり「笑の会」は藤本義一が引継ぎ、活動は活発になり発表会は月に３箇所、秋田先生の一周忌には東京紀伊國屋ホールで芸術祭参加公演、叉、メンバーを中心にしたテレビ番組「漫才笑学校」にも関わるようになり、サラリーマンとの兼業は難しくなって来たのと同時にテロップに名前が出たり、新聞等の取材を受けて写真が載ったりでさすがに会社も見過ごせなくなったようで、九州転勤の辞令を出たのを機会に退職、専業の作家になったのが昭和 56 年 12 月２日 30 歳でした。この日、読売テレビの「上方お笑い大賞・秋田實」を受賞しました。発表日に合わせての退職かと言われましたが実際はこの日迄在籍すると冬のボーナスの受給対象になるからでした。

専業になった当時、オール阪神巨人の番組の漫才台本のレギュラーや NHK の「上方演芸会」他の台本は結構書いていましたが、その殆どはメンバーを更新しながら活動を続ける「笑の会」の若手漫才コンビが中心、その上の年代の演者とはあまり縁がなかった。ところがフリーになった翌年、若手の勉強会の「笑の会」が方針変更、ベテラン・中堅の勉強会となったのです。その背景には昭和 55 年の漫才ブーム、そのきっかけの一つは B&B とザ・ぼんちを擁して紀伊国屋ホールでの「笑の会東京公演」も含まれると思われるが当初の若手演者の育成の役割は一応果たしたと言う事でベテラン・中堅の協力で作家の底上げと演者さんにも新境地を開いてもらおうという事だった。この時のメンバーが青芝フック・キック、上方柳次・一枝、正司敏江・玲児、中田カウス・ボタン、レツゴー三匹、若井小づえ・みどり、若井ぼん・はやと(五十音順)の７組。皆さん、劇場の第一線で活躍されてる実力派ばかり、これで私の交流範囲は一気に拡がり、その後、皆さんとのお付き合いは現在迄あるいは亡くなられる迄続きます。

「笑の会」は翌年から若手育成に戻りますが、私は「上方演芸会」でも若手以外も担当が増え、素人時代にテレビや舞台で見ていたコンビの台本を次々に書く機会を得て、昭和 60 年、現在も放送されている NHK「バラェティ生活笑百科」が始まった時には関西の殆どのコンビの息と間などの個性は頭に入っていました。

その一方で吉本では芸人養成学校・NSC が開校、毎年、多くの漫才コンビがお笑い界に送りこまれる。彼らとはハイヒール等「笑の会」に参加したコンビを除いてはイベントやコンテストで見かける事はあるがそんなに深く関わる事がなかった。それでも一時期「笑百科」にレギュラー出演していたトミーズや「上方演芸会」に出演した数組とは関わることがありました。

50 代の終わり頃、そんな NSC の講師の一員になりました。当時、800 人ぐらいの生徒がいたと記憶している。いくつかのクラスがあって１クラス 30 組ぐらいのコンビが演じるネタを見てアドバイスをするという役目です。

平成 26 年 12 月、よしもと漫才劇場オープンと同時に発足した「上方漫才協会(会長・中田カウス)」の文芸部長を担当する事になった。年に一度行われる「上方漫才協会大賞発表会」で作品として秀でたネタに与えられる文芸部門賞を選ぶのが最大の役割だ。文芸部員にあたる他の作家も同じだが１年を通じて、大阪のよしもと漫才劇場、東京・渋谷∞ホール、神保町まんざい劇場で演じられてるすべてのコンビのネタが対象なので現場または DVD でチェックを行うことになりました。その一環として大阪のまんざい劇場では２ヶ月に一度行われている「翔グランプリ」、神保町まんざい劇場の毎月行われる「グランドバトル」、「チャレンジバトル」の審査を担当、吉本に限ってですが若手芸人事情にはかなり明るくなりました。

という事で前置きは終わりましたが(えっ、これが前置きと驚かれたらすみません)、上記のような経験の中で私は多くの形の漫才を見て来ましたのでこの機会に 60 余年の間に私が見て来た漫才の形について整理してみようと思います。

先人・前田勇は著書「上方演芸辞典」で昭和以降のまんざいを以下のように類別している。

一、音曲万才(表記のまま)

俗曲万才　俗謡・民謡の類を主とするもの。

語り物万才　浄瑠璃・浪花節・琵琶の類を主とするもの。

歌謡万才　流行歌の類。後の歌謡曲もこれに属す。

曲弾き万才　和洋いずれの楽器たることを問わず曲芸的演奏を主とするもの。

二、踊り万才

三、しぐさ万才

寸劇万才　既成の舞台劇・劇映画等の断片を描写するもの。

身振り万才　身振り・表情を主とするもの。

仮装万才　仮装を見せるもの。

四、しゃべくり万才

掛け合い万才　掛け合いでしゃべるもの。

ぼやき万才　本質的には漫談の一種にすぎないもの。

となっている。現代では多少、違和感を感じる部分はあるが、発刊当時としては適確な分類だったのでしょう。また、一つの演目でこれらの分類一本だけでなくいくつかの要素を取り込んで演じていた芸人も多くいたと考えられる。

私がテレビ鑑賞していた頃は多くの音曲漫才が健在でタイヘイトリオ、フラワーショウ、宮川左近ショーの浪曲出身組や民謡からのちゃっきり娘、浄瑠璃の太三味線を持った三人奴、後に「女のみち」のヒットを出す歌謡漫才のぴんからトリオらが思い浮かぶ。ただ、少々、分類に困るのがかしまし娘、俗曲でも語りでもないが歌謡漫才としても括れないショウ的な要素をもった音曲漫才も登場、後に第１回「上方漫才大賞」を受賞する。音曲漫才と言えばトリオが印象深いが、テレビで見ていた頃の横山ホットブラザーズはお父さんの東六師匠が健在で４人組で、同じ時代に活躍をしたあひる艦隊と共に出身は楽士・バンド系の分類に入ると思われる。後、宮川左近ショーも結成当時は４人だった事を付け加えておきます。

トリオの話が出たので楽器を持たないトリオ漫才、漫画トリオも私がテレビでしか見ていない漫才の一組です。当時、しゃべくりだけで通すのは画期的で「今週のハイライト」という時事ネ

タを中心に前半と後半に分け、「喫茶店」「消防車」「サイクリング」「登山」などのショートネタを組み合わせるスタイルは斬新だった。その後、楽器を持たないトリオ漫才としてアクションを取り入れたレツゴー三匹が登場するが、結成メンバーではなく長作が加入した第２次メンバーとは画面ではなく直接の付き合いが長くなりました。

音曲漫才の続きです。音曲漫才はコンビでも、浪曲の暁伸・ミスハワイ、江州音頭の桜川未子・松鶴家千代八ら大看板の他、その頃の漫才コンビ、特に夫婦漫才はどちらかが三味線等の楽器を持ってましたね。後にお付き合いのできる二葉由紀子・羽田たか志のコンビは旦那さんがアコーディオンを持ってました。これは宮川大助・花子らにつながる女性上位漫才の先駆けと言われるミスワカナ・玉松一郎の形なんですね。いずれにしても昭和 45 年の大阪万博前後迄は漫才と音曲の関係は深かったようです。

そしてその頃迄の漫才さんはそれぞれ十八番芸を持っていました。松葉家奴の「魚釣り」荒川きよし「あほだら経」三人奴「人形ぶり」小松まこと「うしろ面」吉田茂「子供になりきる芸」、これは衣装もつけるので上記分類の仮装漫才の部類に入るかもしれない。他にも砂川捨丸の「舞い込み」や数組の演者が「色問答」や「〇〇尽くし」など最後に舞台を盛り上げる芸を演じていました。

そしてこの時代と言っていいのかどうか迷うところですがテレビの普及により日本国中どこででも漫才を見れることになるのですが、それまで寄席の劇場のない地方の人は一生に漫才を見る機会は多くなく、場合によってはナマの漫才を見る事なく人生を終えていく人もいたと思う。そんな地方のお客さんに対しては鉄板の持ちネタ１本あれば舞台は務まるわけで多く見積っても２～３本のネタさえあれば漫才師として生業が成立していたと思われた。ところがそのネタを一度テレビの放送にかけるとインパクトが弱くなる、また、数多くのテレビに出演するコンビについては尚更、新ネタを求められる事になる。ネタの鮮度が重要視されるのは漫才の真骨頂ではあるが年月を掛けて研きあげていくような漫才は徐々に私達の前から遠のいて行きました。

又、その時代の漫才にはネタの中の世界とお客・演者の日常との棲み分けができていたと思うのです。たとえば中田ダイマル・ラケットの「家庭混戦記」という漫才、ダイマルが再婚した後妻の連れ子がダイマルのお父さんと結婚するという。つまり、ダイマルの義理の娘が自分の父親の嫁になる、と言うことは義理の娘ではなく義理の母？いや父親は義理とはいえ娘の婿なのだから義理の息子？……この論争を続ける訳だが聞き手のラケットはダイマルの弟、ダイマルの父は自分の父でもあるのでとても他人事ではないはずなんですが、お客さんはこの二人を兄弟コンビある事を頭の中から消して二人のやりとりを聞いて笑ってくれる。夢路いとし・喜味こいしの二人も兄弟でありながら相手の奥さんや家族の事をボロくそにいう、お互い親戚なのに。でも、お客さんは笑う。きっと、お客の頭のなかには現実ではないその演者が生活する別の世界がイメージできていて、その世界ではそれぞれの奥さんは不細工でボロ家に住んでいてお金に困り時々、相方の財布からお金を盗むと言うキャラクターがイメージできている。そういう架空の世界の出来事と割り切って見てくれていたと思う。そう言う世界の漫才のネタの中で急に現実の話をされると笑ってしまうのです、元夫婦とか暴力事件とか。こういう現実の笑いが受けるとその笑いを多用する。並行してマスコミで個々のプライバシーが公開される。或いは自ら切り売りをする。かくして漫才の中に存在した架空の世界は消えてしまい、日常に関しては現実に即した話題が中

心になって漫才の形は変ってきます。ただ、日常生活を離れた架空の世界については架空以上の妄想ネタという形として平成になって大いに幅をきかすことになります。

大阪で万博が開かれた年、私は社会人になり上記のように演芸場通いが始まります。かつてテレビで見ていた音曲漫才の皆さんの活躍は続いていましたがしゃべくり漫才の皆さんも元気でした。順不同で中田ダイマル・ラケット、夢路いとし・喜味こいし、中田カウス・ボタン、横山やすし・西川きよし、正司敏江・玲児、レツゴー三匹、海原お浜・小浜、若井はんじ・けんじ。あげていけばキリがないですが、特に最後の２組はよく見ました。それは当時、目当てに通っていた海原千里・万里が出演していたトップホットシアターの看板コンビだったからです。そして、この劇場ではしゃべくり漫才の掛け合いに並ぶぼやき漫才の都家文雄をナマで見ました。あの人生幸朗の師匠です。兄弟弟子の東文章もこの劇場で見ました。勿論、人生幸朗・生恵幸子のボヤキ漫才はテレビ・劇場だけでなく台本を書く機会はありませんが収録の現場で多少関わることができました。

さて、先程触れた海原千里・万里は私が漫才作家の道に進むきっかけを作ってくれたコンビです。と言うのはそれまで見た漫才は夫婦や家庭・仕事の話、芝居・経済の話と実感がなく聞くだけで精一杯だったのが、千里・万里の漫才は芸能界やテレビ番組、学校等、身近な話が中心。よし、これなら書けるとその気になってしまい二人を想定した台本を書いてみたのです。幸い友人に放送局の演芸番組のプロデューサーの知り合いがいて繋ぎを取ってもらったのですが台本が手に届く前に千里・万里は解散されてしまいました。ただ、千里こと上沼恵美子とは後に NHK の「バラェティ生活笑百科」で出会う事ができ、「紅白歌合戦」の司会の際のお手伝いや毎年行われた上沼恵美子コンサートでのお姉さんの芦川百々子との復活海原千里・万里の漫才の台本を書かせて頂く機会を得て念願を叶える事ができました。

話戻って、千里・万里の漫才の特徴の一つに物真似を取り入れた事があります。勿論、以前から物真似専門で舞台に出ている芸人さんは多くおられましたが、ネタの主流は動物の鳴き声や音真似、特に戦争時の爆撃音は悲惨な体験なのに印象深いのか、お客さんにはよく受けてました。人物といえば皆に知られた映画スター か超有名で特徴のある歌手或いはは政治家、要は万人が知る物真似の対象人物が少なかったのです。ところが千里・万里はテレビ番組で見る歌手やタレント、具体的には山口百恵・天地真理・桜田淳子らの同世代の歌手の物真似を巧みに取り込んで行きました。この形は後輩のオール阪神巨人や太平サブロー・シローらに受け継がれ、漫才師と言えば物真似の１つや２つ、いや３つ４つ……出来て当たり前となりました。その一方、従来の物真似の世界ではセロテープを使った顔真似、小道具や本格的な衣装導入、ユニットの結成、セリフの工夫（言いそうにないことを言う等）、あらゆる部分でクオリティを高め進化していきました。

私が漫才を書き出した頃の漫才の主流はしゃべくり漫才。これも全編、２人の掛け合いで通す物と後半、設定を作り役を演じる漫才コントに入る物に二分された。漫才コントとは前半の流れに乗って「１回やってみよ」と警官になったり先生になったりするあれである。内容によっては役に入らず演者個人のキャラクターで通すこともある。エンタツ・アチャコの「早慶戦」、ダイマル・ラケットの「僕は幽霊」、いとし・こいしの「交通巡査」等が広い意味でこの部類に入ると思われる。広い意味としたのはこの部分で「国定忠治」や「金色夜叉」「玄冶店」など歌舞伎等の芝居のパロディを演じた典型的な漫才コントに比べるとちょっとゆるいような気がしたからです。

掛け合いで通す漫才といえばB&Bやツービートらどちらか一方的にまくしたてるコンビが思い浮かぶがやすし・きよしの「男の中の男」を始め柳次・柳太、はんじ・けんじ、それに女性しゃべくり漫才の第一人者お浜･小浜らに漫才コントに入らずに盛り上がりを作っていた印象が深い。いずれにしても漫才コントに入る漫才が続いたり掛け合いが続くと聞いている方も飽きるので両方が隆盛だったこの時代は漫才の黄金時代だったと言える。

しゃべくり漫才の話が出た機会に前記の前田勇の分類中の寸劇万才に触れておくと、これは先程の漫才コントとして演じられることも含まれるが多くは衣装をつけ小道具を持ち場合によってはセットの前で演じられる物を指していると思われる。おそらく現代ではコントと呼ばれる物なのでしょう。いつの間にかコントと漫才に境ができて漫才コンビの殆どは漫才とコント両方を演じるが、漫才師に対してコント師なる芸人も多く現れているがルーツから考えて私はコントも漫才のうちと解釈している。因みに今も変わってないと思うがM-1グランプリ上の漫才とコントの区別では小道具を持つか役の上の衣装を着けているとコントとみなされる。私の記憶ではコンビニでアルバイトしている素人の参加者がお店のエピソードの漫才をお店の制服を着て出場して失格になった事があります。コントとみなされたのでしょう。又、余談ですがすゑひろがりずの持つ鼓を小道具だと指摘して周りの失笑を買った若いスタッフがいたと聞いた。漫才のルーツ「千秋万歳」の知識がなかったのである。

M-1の話とは時代が前後するが昭和55年漫才ブームが起こる。ザ・ぼんち、B&B、紳助・ 竜介、のりお・よしお、いくよ・くるよ、サブロー・シローらが一挙に全国ネットの人気者になり、東京の漫才コンビツービート、コントの赤信号らと一時代を築いた。皆、10年近く下積みを経験して来た人達だ。

当時、このブームについて意見を求められ「漫才という芸能が生き延びる事が出来た」と答え顰蹙をかった事があったがこれを機会に漫才の客層が変わった。それまでの演芸場のお客さんは年配の人が中心だったのが女子中高生であふれるようになったのだ。先程、名前を挙げたコンビがアイドルになったのです。その兆しはその少し前からあった。中田カウス・ボタンがすでに若いお客を掴みアイドル漫才師の第一号になっていた。これはネタの内容や衣装を若いお客を意識したご本人達の戦略によるもので、Ｇパン Ｔシャツ、長髪で舞台に立ったのはこのコンビが初めてだと思う。

振り返るとしゃべくり漫才の元祖エンタツ・アチャコがそれまで着物が当たり前だった漫才師の衣装をタキシードなどの洋服に替え、内容も身近なネタにした事により寄席の客層がオジサンから大大阪と呼ばれた大阪で働く多くの若者達に変わって行ったのと同じように、漫才ブームで客層がオジサンから女子高生に変わっていったのです。因みにマンザイブーム前のオジサンさん客はエンタツ・アチャコ登場時代の演芸場に駆けつけた若者達か、その世代の影響を受けた子供達だと私は考えています。つまりこの世代が昭和の漫才の殆どを支えて来たのだと思います。

漫才師アイドル化によって漫才の形も変わって来ます。ギャグやキャラクター頼りのショートネタが中心になり長尺物は演じられなくなりそれに伴い一組の持ち時間も短くなる。これについては逆説もあり、CMの時間の都合上、一組の持ち時間が少なくなり長尺物ができなくなったと言う……。いずれにしても若者の漫才に満足出来ない昭和の漫才を支えたオジサン達は中堅・ベテランの漫才を支持する。これによって漫才の客層は二分され、昔からの演芸場の他に若手中心の劇場の開設に繋がる。

アイドル漫才の傾向は現在迄続き、後に誕生するNSCから多くのアイドル漫才師を生み出している。ただし、アイドル性だけでなく漫才の実力がある者しか生き残っていけない事は言う迄もありません。

50代後半に吉本の芸人養成学校NSCの講師となる。よく考えると漫才とは不思議な芸で、本来芸事とは師匠がいて弟子がいて師匠は弟子に芸を伝授し指導するものだが漫才の師弟には師匠が自分の芸を弟子に伝授することもないし、弟子の漫才について細部に指導することはまずない。現在、落語家の世界がそうであるように弟子修行を経験しないとプロデビューができない傾向が漫才の世界にもかつてあったが落語界程厳密に芸の伝授・指導が行われていなかったと思われます。ある漫才の師匠は弟子には自分の生き様を学べと言っていたと聞きます。

芸人の養成所はNSCが初めではなく松竹芸能が昭和40年代にタレント養成所を開校し、春やすこ・けいこを皮切に太平サブロー・シロー、宮川大助らを世に送り出し、後に増田・岡田、よゐこ、オセロらを輩出している。それに続き松竹新喜劇の幹部だった喜劇役者の曽我廼家明蝶が明蝶学院を創設、喜劇俳優育成が目的だったが横山たかし・ひろし、海原はるか・かなた、浮世亭三吾・十吾らの漫才コンビが育った。また昭和50年代には蝶々・雄二のコンビで人気者だったミヤコ蝶々が蝶々新芸スクールを開設、最近パピヨンズに改名したミヤ蝶美・蝶子は現在も活動をしている。また、戦前の吉本でも芸人志望者を募り秋田實らの指導で漫才師の養成をしている。その卒業生が秋田ＡスケＢスケである。

と、過去にも例があり今や東京を含めお笑いのプロダクションに併設されている養成所ですがどんな事を教えているのか？生徒達はどうして漫才を覚え作っていくのか？ 実を言うと私は養成所の講師をするのは初めてではなく、30才で脱サラした時、先に挙げた蝶々新芸スケールの漫才担当に招かれているのです。その当時の漫才の授業は課題のテキストがあり、生徒はそれを覚え、講師の前で演じ駄目出しを受けるというものでした。この学校で使ってたテキストがシナリオ学校を卒業後に秋田先生を通じて来た仕事で何人かが応募した中、女性コンビ用と男・女コンビ用が私のが採用され、ずっと使用されていたという縁があり、漫才の指導は学校解散迄続けさせていただいた。

おそらく他の養成所でも当時の漫才の指導はテキストの台本を元に行われていたと思うが生徒数が800人もいるとそうはいかない。これも漫才という芸の不思議なところで誰に教わる事もなく台本を作り演じる事ができ、最初は見よう見真似だったのが回を重ねていくとオリジナリティが出て形になってくるのです。

ネタ見せ担当の講師は数人いて主に作家、それに現役芸人(主にネタ作りをしてる側)が中心でお互い他の講師の指導内容はわからない。が指導(アドバイス)の基本は発想と設定である。芸人の講師はネタの内容に加えてテクニックや話術についてのアドバイスもしているようだが、全般に技術よりセンスが重視されるようになる。

又、これには若手の劇場の出番時間も関係している。今、大体若手の持ち時間は５分、M-1等コンテストの決勝、劇場出演権を競う各種バトルの制限時間が４分。見る側も話術よりセンスある漫才に惹かれるのだ。そして、そのセンスを理解できないお客は「今の若い子の漫才は解らん」と漫才から離れて行くのです。尚、お客さんの前で４分の漫才を披露出来るのは若手の中でも勝ち組でNSCの授業のネタ見せやM-1の予選１回戦の持ち時間２分。この２分のネタづくりに心骨を注ぎ、２分のネタしか演じられないままにお笑いの世界から去ってゆく若者が多くいる。

こうして今の若手のコンビはアイデアが勝負となり、全編掛け合い、後半漫才コントの形は残るが漫才コントより最初から衣装を着けたコントの方が伝わりやすいとコント、また、楽器を持ったコンビやリズムに乗せた掛け合いのリズムネタ、(ま、この辺は音曲漫才の復活とも言える)、スケッチブック等表示する物を用いたフリップ芸、更にフリップと歌をコラボさせたもの、と日夜、頭を絞ってアイデアを捻り出しているのです。きっとお客さんもアイドルとしてだけでなくそんな出演者達の努力の結果を楽しんでいるのだと思います。漫才の見方も変わってきたのでしょう。

と、私が見てきた漫才の形を紹介してきたつもりですが、これが全てではありません。特にコンテスト用の４分漫才について書いてきましたが勿論、漫才といえば４分だけではありません。コンテスト以外の出番やイベント等、仕事先によって様々な形の漫才を演じる事になるのですが、最終的に私が思うのは漫才の形はお客さんによって決められる、お客さんあっての漫才だと言うことです。(敬称略ですみません)

上方演芸資料館運営状況（令和２年度）

■ 上方演芸資料館（ワッハ上方）入館者数・視聴ブースリクエスト件数〔月別推移〕

	入館者数	開館日数	１日あたりの平均人数	視聴ブースﾘｸｴｽﾄ件数（月計）
４月	※1 0 人	※1 0 日	―	―
５月	※1 102 人	※1 12 日	9 人	49 件
６月	497 人	25 日	20 人	215 件
７月	1,214 人	27 日	45 人	241 件
８月	1,210 人	26 日	47 人	255 件
９月	1,395 人	26 日	54 人	273 件
10 月	1,952 人	27 日	72 人	318 件
11 月	1,638 人	25 日	66 人	309 件
12 月	978 人	24 日	41 人	192 件
１月	790 人	24 日	33 人	192 件
２月	962 人	24 日	40 人	210 件
３月	1,428 人	26 日	55 人	255 件
合 計	12,166 人	266 日	46 人	2,509 件

※１　新型コロナウイルス感染症拡大防止により令和２年５月 18 日まで臨時休館
（令和２年２月 29 日から）
〔休館日〕毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は、翌平日が休館日）及び年末年始

〔過去３か年（平成 29～令和元年度）〕

	入館者数	開館日数	１日あたりの平均人数	視聴ブースﾘｸｴｽﾄ件数
H29	14,096 人	255 日	55 人	7,096 件
H30	※2 7,567 人	※2 171 日	44 人	4,623 件
R１	※3 34,541 人	※3 264 日	131 人	4,857 件

※２　平成 30 年４月１日～11 月 30 日までの数値
（施設改修工事のため、平成 30 年 12 月１日～平成 31 年４月 23 日まで休館）
〔休館日〕毎週水、木曜日及び年末年始
※３　平成 31 年４月 24 日（リニューアルオープン）～令和２年２月 28 日までの数値
新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため令和２年２月 29 日から臨時休館
（令和２年５月 18 日まで）

■ 上方演芸資料館運営懇話会　開催実績

１回開催　（令和３年２月 25 日）

■ 運営懇話会各部会　開催実績

・殿堂入り部会

２回開催　（令和２年 12 月７日、令和３年１月 13 日）

・資料整理・活用部会

１０回開催（概ね月に 1 回程度開催）

・企画部会

１回開催　（令和３年２月 12 日）

・放送資料部会

１回開催　（令和３年３月 11 日、書面による開催）

■ 研修会実施報告

資料整理・活用部会（展示事業及び資料整理に係る有識者会議）出席者で研修会を実施。
各回、テーマに沿って、講義を受けた。

＜実績＞

開催日	部会等	研　修　内　容	講師
8 月 18 日	第 3 回部会	隅田川千鳥の巡業日誌について	荻田部会長
9 月 8 日	第 4 回部会	国勢調査とレコード	大西委員
10 月 13 日	第 5 回部会	明治中期京都演芸摺物について	荻田部会長
11 月 10 日	第 6 回部会	末広亭小辰丸のニット一長時間レコード	大西委員
12 月 8 日	第 7 回部会	三代目日吉川秋水資料整理中間報告―カセットテープ―	荻田部会長
2 月 16 日	第 9 回部会	末広亭小辰丸のニット一長時間レコード・続	大西委員

■常設展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
常設展示エリア	【テーマ・ねらい等】 　大阪弁の解説パネルや、歴史的価値のあるポスター展示のほか、映像音声視聴ブースを設置。上方演芸の歴史を知ることができるコーナー。	

■企画展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
企画展示エリア	【テーマ・ねらい等】 「演芸人とアート（芸人さんは多才だ！）展」 昭和から令和までの時代を彩る芸達者な演芸人が生み出した小道具や絵画などのアート作品を通して、上方演芸の歴史や演芸人の新たな一面に触れ、楽しんでいただける展示。開催期間中に、アート作品の随時入れ替えを実施。	

■特別展示　開催実績

場　所	内容	展示風景
体験エリア	【テーマ・ねらい等】 「生誕100周年　追悼ミヤコ蝶々展」 収蔵資料をもとに、殿堂入り名人の足跡をたどり、上方演芸の魅力や歴史を紹介する連続企画「上方演芸の殿堂入り名人　特別展」を、今年度から新たに実施。 今回は、昭和から平成にかけ上方漫才界等で活躍し、今年、生誕100年、没後20年の節目にあたる、ミヤコ蝶々氏にスポットを当て開催。	

■ 館外展示　開催実績

〇目的：特別展示と連動し、ミヤコ蝶々氏が約30年住まわれていた箕面市において開催し、府民に上方演芸に親しんでもらう機会を提供するとともに、資料館のＰＲを行った。

場　所	開催時期等	会場風景
箕面市立郷土資料館 （箕面市）	【開催期間】 11月13日(金)～25日(水) 〔13日間〕 【見学者数】 969人 【タイトル】 生誕100周年　追悼ミヤコ蝶々展 【展示資料】 手ぬぐい、図書等　収蔵資料14点	

■ 館内イベント開催実績

・体験型講習会（ワークショップ）

開催回数　16 回、参加者数　325 人

（※実施期間：令和２年７月～10 月）

・在阪演芸プロダクション等とのコラボイベント

開催回数　4 回、参加者数　59 人

（※実施期間：令和２年７月～10 月）

・アマチュア団体との事業連携

上記在阪演芸プロダクション等とのコラボイベントのほか、アマチュア団体との連携により、共催イベントの開催や資料館に関する広報等を行った。

開催回数　1 回、参加者数　14 人（※実施日：令和２年９月 27 日）

上方演芸の殿堂入り

上方演芸は大阪の誇るべき文化としていつの時代も人々に愛され、受け継がれてきました。それぞれの時代に光り輝き、大勢の観客を楽しませた演芸人さんがあまたおられます。

上方演芸資料館では、平成８年度から、「上方演芸の発展と振興に特に大きな役割を果たし、広く府民の皆様から愛し親しまれた方で、後進の目標となる方」を対象に選考し、「上方演芸の殿堂入り」名人を決定しています。令和元年度（第 23 回）までに落語・浪曲・講談・漫才・漫談・コメディアンなど 58 組 94 名の方々が受章されてきました。

第24回目となる令和２年度は、ゼンジー北京さんが受章され、表彰式は新型コロナウイルスの感染拡大の影響により実施が遅れましたが、令和３年11月９日に大阪府公館で開催しました。

ゼンジー北京

（画）イラストレーター成瀬國晴氏

「上方演芸の殿堂入り」名人一覧表

第 1 回（平成８年度）	初代桂春団治、五代目笑福亭松鶴、横山エンタツ・花菱アチャコ、 砂川捨丸・中村春代、二代目旭堂南陵、三代目吉田奈良丸
第 2 回（平成９年度）	ミスワカナ・玉松一郎、中田ダイマル・中田ラケット、花月亭九里丸
第 3 回（平成 10 年度）	六代目笑福亭松鶴、芦乃家雁玉・林田十郎、梅中軒鶯童
第 4 回（平成 11 年度）	二代目桂春団治、松葉家奴・二代目松葉家喜久奴、初代京山幸枝若
第 5 回（平成 12 年度）	四代目桂米団治、松鶴家光晴・浮世亭夢若、西条凡児
第 6 回（平成 13 年度）	二代目桂枝雀、浪花家市松・浪花家芳子、冨士月子
第 7 回（平成 14 年度）	橘ノ円都、桜川末子・二代目松鶴家千代八、吾妻ひな子
第 8 回（平成 15 年度）	都家文雄・都家静代、林家とみ
第 9 回（平成 16 年度）	夢路いとし・喜味こいし、横山やすし・西川きよし
第 10 回（平成 17 年度）	三代目林家染丸、五代目桂文枝、海原お浜・海原小浜、宮川左近ショー
第 11 回（平成 18 年度）	ミヤコ蝶々・南都雄二、人生幸朗・生恵幸子、三代目旭堂南陵
第 12 回（平成 19 年度）	ミスワカサ・島ひろし、島田洋之介・今喜多代、京唄子・鳳啓助
第 13 回（平成 20 年度）	横山ホットブラザーズ、暁伸・ミスハワイ
第 14 回（平成 22 年度）	三代目桂米朝
第 15 回（平成 23 年度）	二代目露の五郎兵衛、若井はんじ・若井けんじ
第 16 回（平成 24 年度）	上方柳次・上方柳太、岡八朗（コメディアン）
第 17 回（平成 25 年度）	川上のぼる、木川かえる
第 18 回（平成 26 年度）	二代目平和ラッパ、タイヘイトリオ
第 19 回（平成 27 年度）	秋田Ａスケ・秋田Ｂスケ、花紀京（コメディアン）
第 20 回（平成 28 年度）	三代目桂春団治、二代目春野百合子
第 21 回（平成 29 年度）	かしまし娘
第 22 回（平成 30 年度）	レツゴー三匹、三遊亭小円・木村栄子
第 23 回（令和元年度）	二代目笑福亭松之助、Ｗヤング（平川幸男・中田治雄・佐藤武志）
第 24 回（令和２年度）	ゼンジー北京

※　平成８年度～令和２年度／59 組 95 名

三代目旭堂南陵襲名記念　額「寄席鍋」について

荻田　清
(資料整理・活用部会長)
(梅花女子大学名誉教授)

令和２年の「ワッハ上方企画展」の「芸人さんは多才だ！」に出品されていた「三代目旭堂南陵襲名記念　額「寄席鍋」」が、関係者のご好意で上方演芸資料館に寄贈されることになった。この機会に考証を加えて改めて紹介しておきたい。（図版１）

図版１　三代目旭堂南陵襲名記念　額「寄席鍋」

まず額に書かれた文字を確認しておこう。

寄席鍋
昭和四十一年十月九日
於　角座　楽屋
貞丈　松鶴　南陵　染二　桂小文治　染丸　林家染語楼　米朝　花丸　吉田一若　朝丸
我太呂　小米　春蝶
三代目
旭堂南陵師

サインは右から左にかけて読んだ。中央の鍋の絵が三代目南陵の絵。この人のサイン色紙には一見幽霊に見える雲水の絵が有名で、素朴ながら味わいのある絵を描いていた（図版２）。

ここが「芸人さんは多才だ」のテーマにあうところ。「旭堂南陵師」の文字は誰のものか不明。

この時の角座の興行を説明しておこう。当時角座が毎月発行していたPR誌の「十月のお笑い号」の表紙（図版３）には幟の中に「上席　旭堂南陵襲名興行」とあり、横には難波戦記を得意とした南陵にちなんで、大阪城と千成瓢箪が描かれている。巻頭には演芸評論家・吉田留三郎が「三世旭堂南陵　一上方講談の水脈を涸らすなかれ一」を載せている。二代目から三代目への芸の継承の様を述べ、上方の講談隆盛にむけて応援のことばを贈っている。次の頁には桂小文治の写真と経歴。当時東京の落語芸術協会副会長で、もともとは七代目桂文治の弟子で小米から米丸を経て小文治となった人。大阪の落語家だった。「私の履歴書　先代旭堂南陵」「御挨拶　三世旭堂南陵」があって、東京から来演の一龍斎貞丈の写真と談話と経歴がある。

図版２　三代目南陵の色紙

図版３　昭和 41 年 10 月「お笑い号」表紙

なお、この時の興行の出演者は、以下のとおり。漫才一浪花クマゴロ・ハチゴロ、漫才一堤よし枝・英二、落語一林家染語楼、漫才一夢乃タンゴ・西川ひかる、漫才一橘ミノル・双葉みどり、落語一笑福亭松鶴、漫才一京はる子・五条家菊二、講談（東京より来演）一一龍斉貞丈、ロマンリズム一暁伸・ミスハワイ

中入りがあって、口上

司会　林家染語楼、ご挨拶一都家文雄、桂小文治、一龍斉貞丈、笑福亭松鶴、旭堂南陵

休憩があって

講談一旭堂南陵、漫才一市松笑顔・塚本やっこ・市松笑美子、落語(東京より来演)一桂小文治、漫才一中田ラケット・ダイマル

ぼやき漫才で有名な都家文雄が口上に並んでいるのは、文雄の芸界出発は桂歌路を名乗る落語家だったことからの縁と思われる。

改めて、額を見てみよう。貞丈は東京の講談師。五代目。明治39(1906)年～昭和43(1968)。四月に講談組合頭取に就任しており、当時の講談界を代表する実力者だった。松鶴は六代目。大正７（1918）年～昭和61（1986）年。昭和32（1957）年に、この人らの呼びかけで上方落語協会が

設立される。染二は林家染二。のちの四代目林家染丸。出番はないが、師匠の三代目染丸について楽屋入りしていたと思われる。桂小文治は東京からの来演。明治26(1893)年～昭和42(1967)年。染丸は三代目。明治39(1906)年～昭和43(1968)年。当時上方落語協会会長。林家染語楼は三代目。大正７(1918)年～昭和50(1975)年。三代目染丸とは兄弟弟子、新作落語で鳴らした人。米朝は三代目桂米朝。大正14(1925)年～平成27(2015)年。出番はないが襲名祝いにかけつけたものであろう。花丸は笑福亭花丸。のちに廃業したため印象が薄いが、当時は若手の有望株として期待されていた。10月下席の出番が組まれており、松鶴について来ていたものであろう。同じ「10月お笑い号」には演芸評論家・相羽恵夫の紹介文があり、「語り口調は、もう大看板のそれに激しく肉迫している」と評されていた。

吉田一若は浪曲師。２代目。昭和８(1933)年～昭和59(1984)年。三代目吉田奈良丸の弟子。朝丸は桂朝丸、のちの桂ざこば。現役。我太呂は桂我太呂。二代目春団治の弟子。のちの三代目桂文我。昭和８(1933)年～平成４(1992)年。小米は桂小米。のちの二代目桂枝雀。昭和14(1939）年～平成11(1999)年。朝丸、小米とも米朝に付いて来たものと思われる。春蝶は二代目桂春蝶。昭和16(1941)年～平成５(1993)年。この額の中に三代目桂春団治の名がなぜか見えないが、春団治に代わっての立場だったかとも思われる。

『藝能懇話』第十七号の田中靖治「昭和40年代落語会の記録」によれば、昭和41年１月現在の上方落語協会の会員が列挙されている。長老の橘ノ円都はじめ総勢33名。中に旭堂小南陵(三代目南陵)と女道楽の吾妻ひな子の名もみえる。当時、上方落語は戦後の復興からようやくたしかな躍進の兆しが見えてきた時代。一方、上方講談は依然として孤軍奮闘の時代だった。弟子は誰もいない。この額はそういう上方の演芸史をふりかえる意味で貴重な資料であろう。上方講談の現状は、芸の主張もあっていくつかに分かれてはいるが、当時を思えば信じがたいほどの盛況である。三代目南陵から出た枝葉は着実に茂り、ひ孫弟子も舞台に上がる時代となった。吉田留三郎の文章をしみじみと読み返している。

なお、額の寄贈に関しましては、四代目南陵嗣子旭堂南也氏のご好意によるものです。また、三代目のお弟子さん、旭堂南左衛門、旭堂南鱗、旭堂南北、旭堂南海、各氏の了解も得ました。角座のプログラムは演芸資料収集家・谷本健氏のご教示を得ました。御礼申し上げます。

砂川捨丸の SP レコード―府立上方演芸資料館所蔵盤について

大西　秀紀
(資料整理・活用部会委員)
（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター客員研究員）

砂川捨丸(1890–1971)はその生涯に数多くのレコードを残した。これらは捨丸が 30～50 歳代の芸人としても油の乗った時期の録音で、その芸態を知るには第一級の資料である。捨丸はまた大阪府立上方演芸資料館にとって最も所縁のある漫才師といっても過言ではなく、当館のオープンと同時に制定された「上方演芸の殿堂入り」の第 1 回に殿堂入りを果たしている。本稿ではあらためてその功績をたたえる意味でも、当館所蔵の捨丸レコードをご紹介したい。

捨丸の漫才はいわゆる「芸尽くし漫才」といわれるスタイルで、唄や踊りや楽器演奏などを見せることがネタの中心となっている。その内容はきわめて多彩で、たとえば唄物なら安木節や串本節などを始めとする俚謡や、都々逸、大津絵、鎗さびなどの端唄・俗曲、ラッパ節、ストトン節などのはやり流行唄、鳩ポッポなどの唱歌やさまざまな数え唄、あるいは街角の物売り唄や浅草オペラまでも取り込んでいる。また唄物以外でも義太夫、新内、琵琶歌、浪花節などの語り物は元より、捨丸の本芸ともいえる江州音頭や河内音頭、のぞきからくりや物売りの口上、歌舞伎や新派の台詞、映画説明や名所解説、あるいは三曲萬歳などの古典萬歳の一説、そしてなぞかけや色問答、無理問答などさまざまな問答類など、まさに芸尽くしの名に恥じないレパートリーの広さである[1]。

捨丸のレコードデビューを大正 7(1918)年とする説[2]があるがこれは誤りで、大正 10(1921)年の 8 月から 10 月にかけて、ニッポノホンから発売された次の 7 枚が初めてのレコーディングである[3][4]。

4363/4364　義太夫ふきよせ　大正 10(1921)年 10 月
4365/4379　くるわぞめき五段返し/音曲綴　大正 10(1921)年 9 月
4366/4375　説教/虫づくし　大正 10(1921)年 10 月
4367/4368　萬歳（上）（下）　大正 10(1921)年 9 月
4369/4376　尼港五段返し/春雨　大正 10(1921)年 9 月
4371/4372　不如帰（上）（下）　大正 10(1921)年 8 月（当館所蔵）
4381/4382　合財袋　大正 10(1921)年 8 月（当館所蔵）

これら 7 枚を皮切りとして、最後の吹込みと思われるリーガルの昭和 18(1943)年 2 月新譜「船を造らう（レコード番号 150452）」までの 22 年間に、捨丸のレコードはオリエント、ニットー、ヒコーキ、リーガルといずれも一流のレーベルから、260 枚を超える数が発売され[5]た。

このことは 22 年の間ほぼ毎月 1 枚のペースで発売されたことになり、同じようにレコードになった他のどの漫才師たちも遠く及ばない枚数である。

図１　捨丸が最初に吹込んだ７枚の内の１枚（当館所蔵）

当館は 109 種 218 枚（重複を含む）の捨丸レコードを所蔵している（図２参照）。これらは捨丸の全レコードから見ると半分以下の種類に過ぎないが、大正 10 年のレコードデビュー時のものに始まり、昭和 15 年 5 月新譜の「唄と薬屋（リーガル 150020）」を最後に、その間の各年に発売されたいくつかのレコードで成り立っている（ただし大正 11 年を除く）。したがってあくまでもレコードの上からだが、これら 109 種を聴くことで、この期間の捨丸の漫才の変遷をほぼ途切れることなく俯瞰することができるといえる。また捨丸のレコードはすべて女性の相方との漫才だが、レーベルには砂川捨丸とだけあるものと、捨丸と相方の名前が併記されているものがある。レコードレーベルに見る捨丸の相方は、加藤瀧子、高橋ライオン、中村春代、橘家久栄、荒川歌江の 5 名だが、当館の所蔵盤にはこれらすべての相方のものが含まれているのは貴重である。

当館の捨丸レコードは複数の方々からのご寄贈によるもので、そのため重複が多く見られる。その中でも「即席問答（オリエント 60149）」が再発売の「同（リーガル 65345）」と合わせて 14 枚と最も重複が多く、続いて「冥途旅行/此世の説経（オリエント 60563）」が「同　（リーガル 65358）」と合わせて 11 枚、「不如帰（オリエント 60730）」が「同　（リーガル 65348）」と合わせてこちらも 11 枚。続いて「捨丸小原節（リーガル 66567）」が 6 枚の重複といったところが目に付く。所蔵盤は 218 枚だが、その中にこれだけの重複があるということは、当時よほどヒットしたものだと考えられる。

現在人々の記憶に辛うじて残る砂川捨丸といえば、自らを「漫才の骨董品」と称し、「アラヨイショ　ヨイショ、角座へ漫才見に行こか」と串本節を唄う飄々とした舞台姿であろう。しかし捨丸の SP レコード、とりわけ大正期の加藤瀧子や高橋ライオンが相方のものを聴くと、テンポ良くお互いが持てる芸を実際の舞台さながらにぶつけ合うバイタリティに圧倒される。そしてそれは決して古めかしいものではなく、現代のしゃべくり漫才や歌ネタ漫才に繋がる芸脈であることは

明らかである。捨丸のレコードは今でも日本全国で見かけるといわれるが[6]、このことは捨丸らの芸尽くしが本物の唄い手や音頭取りの代役をはたし、なおかつレコードを買った全国の聴き手に繰りかえし愛聴された何よりの証拠である。捨丸は全国規模で活躍した、当時一流のインフルエンサーだったといえるのではないだろうか。

＊図２でタイトルが太字のものは当館でお聴き頂けます

【註】

1　岡田則夫「砂川捨丸のレコード」『ﾚｺｰﾄﾞ･コレクターズ　11 月号』ミュージックマガジン社、通巻第 2 巻第 4 号、1983、p.56-69

2　倉田・藤波編『日本芸能人名辞典』、三省堂、1995、p.491

3　吉田留三郎『まんざい風雲録』、九藝出版、1978、p.149―154

4　倉田喜弘『演芸資料選書４　演芸レコード発売目録』国立劇場、1990

5　岡田、前掲書

6　岡田、前掲書

【参考資料】

＊ニッポノホン　ワシ印レコード総目録、日本蓄音器商会、大正 13（1924）年 5 月

＊岡田則夫「鼓を持って 70 年、砂川捨丸」『萬歳の至芸　砂川捨丸』大道楽レコード DAI-001（CD)、メタ・カンパニー、1992

＊石井重堂「萬歳屋「捨丸先生」のレコード　1-10」『上方芸能　108-117、120 号』、「上方芸能」編集部、1991-1995

＊前田勇『上方まんざい八百年史』、杉本書店、1975

図２　大阪府立上方演芸資料館所蔵　砂川捨丸ＳＰレコード一覧
（タイトルが太字のものはデジタル化済み）

書誌番号	タイトル	演者	レーベル	レコード番号	発売時期
35734	**不如帰（上)(下)**	砂川捨丸	ニッポノホン	4371/4372	大正10(1921)年8月
47190	不如帰（上)(下)	砂川捨丸	ニッポノホン	4371/4372	大正10(1921)年8月
47186	**合財袋（上)(下)**	砂川捨丸	ニッポノホン	4381/4382	大正10(1921)年8月
47183	合財袋（上)(下)	砂川捨丸	ニッポノホン	4381/4382	大正10(1921)年8月
13382	**のぞき（須磨の仇浪）/唄返し**	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2488	大正12(1923)年1月
46818	のぞき（須磨の仇浪）/唄返し	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2488	大正12(1923)年1月
46839	のぞき（須磨の仇浪）/唄返し	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2488	大正12(1923)年1月
46815	**文句入　鴨緑江節/鴨緑江節**	砂川捨丸	オリエント	2499	大正12(1923)年2月ヵ
47182	文句入　鴨緑江節/鴨緑江節	砂川捨丸	オリエント	2499	大正12(1923)年2月ヵ
47185	文句入　鴨緑江節/鴨緑江節	砂川捨丸	オリエント	2499	大正12(1923)年2月ヵ
6943	滑稽浪花節/浪花節後付	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2517	大正12(1923)年3月
11851	滑稽浪花節/浪花節後付	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2517	大正12(1923)年3月
47057	滑稽浪花節/浪花節前後	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2517	大正12(1923)年3月
13270	**数へ唄(間違ひづくし）（上)(下)**	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2532	大正12(1923)年4月
6701	数へ唄(間違ひづくし）（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2532	大正12(1923)年4月

46819	数へ唄(間違ひづくし）（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2532	大正12(1923)年4月
46840	数へ唄(間違ひづくし）（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2532	大正12(1923)年4月
48912	数へ唄(間違ひづくし）（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2532	大正12(1923)年4月
47360	大津絵・都々逸/しゃべくり万歳	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2573	大正12(1923)年6月
60795	忠臣蔵（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2754	大正13(1923)年1月
6704	安来節/どんどん節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2622	大正12(1923)年9月
6522	安来節/どんどん節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2622	大正12(1923)年9月
46817	安来節/どんどん節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2622	大正12(1923)年9月
46838	安来節/どんどん節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2622	大正12(1923)年9月
6947	書生唄合財袋（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2635	大正12(1923)年10月
23171	書生唄合財袋（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2635	大正12(1923)年10月
6948	金色夜叉/戸籍志らべ	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2662	大正12(1923)年11月
47180	金色夜叉/戸籍しらべ	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2662	大正12(1923)年11月
48911	数え唄テレクサイ/替唄ふきよせ	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2675	大正12(1923)年12月
46928	数え唄テレクサイ/替唄ふきよせ	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2675	大正12(1923)年12月
46929	かりかり節/東曇くづし	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2695	大正13(1924)年1月
13372	鎗さび/小原節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2727	大正13(1924)年2月
6945	鎗さび/小原節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2727	大正13(1924)年2月
46859	鎗さび/小原節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2727	大正13(1924)年2月
46837	スットントン節/安来節	砂川捨丸	オリエント	2768	大正13(1924)年5月
47178	即席問答（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	2784	大正13(1924)年6月
47179	即席問答（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	2784	大正13(1924)年6月
46801	男女同権（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2798	大正13(1924)年7月
47058	男女同権（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2798	大正13(1924)年7月
48915	男女同權（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	2798	大正13(1924)年7月
46836	大津絵都々逸/さのさ節	砂川捨丸	オリエント	2816	大正13(1924)年8月
47136	八木節/小原節	砂川捨丸・高橋ライオン	オリエント	2851	大正13(1924)年10月
46816	不如帰（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	2871	大正13(1924)年11月
47187	明けからす（安来節）（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	2961	大正14(1925)年2月
23172	萬歳小唄（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	2977	大正14(1925)年3月
47188	萬歳小唄（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	2977	大正14(1925)年3月
23173	驚き世界/自転車節	砂川捨丸	オリエント	3003	大正14(1925)年4月
23174	江州音頭/河内音頭	砂川捨丸	オリエント	3029	大正14(1925)年5月
47189	端唄吹きよせ浄瑠璃（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	3057	大正14(1925)年6月
47177	私の商売/砂川甚句	砂川捨丸	オリエント	3116	大正14(1925)年7月
39775	玉章の文句（上)(下)	砂川捨丸	オリエント	3226	大正14(1925)年10月
39840	名鳥名木/関の五本松	砂川捨丸	オリエント	3330	大正15(1926)年1月
46860	名鳥名木/関の五本松	砂川捨丸	オリエント	3330	大正15(1926)年1月
46934	切られ与三郎（安来節）/博多節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	3393	大正15(1926)年3月
13424	石童丸（上)(下)	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	3429	大正15(1926)年4月
13351	掛合ぞめき/新成金節	砂川捨丸・加藤瀧子	オリエント	3448	大正15(1926)年5月
63458	カンカン問答/赤い顔	砂川捨丸・中村春代	オリエント	3651	大正15(1926)年11月
46935	物の初まり/古代安来節	砂川捨丸	オリエント	3725	昭和2(1927)年1月
46933	捨丸の健康診断（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	3845	昭和2(1927)年5月
39777	捨丸の映画劇(1)(2)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	3927	昭和2(1927)年7月
39776	捨丸の映画劇(3)(4)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	3928	昭和2(1927)年7月
42012	今昔数え唄(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4096	昭和3(1928)年1月
23175	丸角問答（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4248	昭和3(1928)年5月
39829	新式商売（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4316	昭和3(1928)年7月
23176	新式商売（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4316	昭和3(1928)年7月
39817	地獄のラジヲ（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4414	昭和3(1928)年10月
39796	音楽教授（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4448	昭和3(1928)年11月
39789	唄理屈（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4597	昭和4(1929)年3月
42071	尻取問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4603	昭和4(1929)年4月
39819	芝居行進曲(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4647	昭和4(1929)年5月
39818	芝居行進曲(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4647	昭和4(1929)年5月
41883	芝居行進曲(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4647	昭和4(1929)年5月
39858	洋行みやげ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4677	昭和4(1929)年6月
39860	洋行みやげ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4677	昭和4(1929)年6月
39861	洋行みやげ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4677	昭和4(1929)年6月

41882	洋行みやげ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4677	昭和4(1929)年6月
39792	**干支万歳（上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4709	昭和4(1929)年7月
41779	説教/しんしんづくし	砂川捨丸・中村春代	オリエント	4725	昭和4(1929)年8月
39759	脱線夢判断（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60084	昭和4(1929)年12月
39761	脱線夢判断（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60084	昭和4(1929)年12月
39763	脱線夢判断（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60084	昭和4(1929)年12月
39779	**即席問答(上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
39751	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
39784	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
39785	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
39788	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
39790	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
42028	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
42050	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
35767	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60149	昭和5(1930)年3月
44545	てれくさい/忠勇節	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60226	昭和5(1930)年7月
35753	**物売の掛声/唄もの色々**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60272	昭和5(1930)年9月
41839	物売の掛声/唄もの色々	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60272	昭和5(1930)年9月
39837	メンタルテスト(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60287	昭和5(1930)年10月
44546	唄レヴユー(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60327	昭和5(1930)年12月
39835	**名物俚謡行進曲（上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60494	昭和6(1931)年8月
39830	名物俚謡行進曲（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60494	昭和6(1931)年8月
42026	名物俚謡行進曲（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60494	昭和6(1931)年8月
39767	月形半平太(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60495	昭和6(1931)年8月
39844	**顔仕替へ/二つ三つ四つ問答**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60531	昭和6(1931)年9月
39845	顔仕替へ/二つ三つ四つ問答	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60531	昭和6(1931)年9月
41844	**冥途旅行/此世の説教**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60563	昭和6(1931)年10月
42073	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60563	昭和6(1931)年10月
41759	今昔数へ唄(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60688	昭和7(1932)年1月
42037	今昔数へ唄(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60688	昭和7(1932)年1月
41848	満蒙出兵/脱線唄	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60729	昭和7(1932)年2月
39799	**不如帰(上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60730	昭和7(1932)年2月
33470	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60730	昭和7(1932)年2月
39807	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60730	昭和7(1932)年2月
39750	出鱈目演説/しんしんづくし	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60773	昭和7(1932)年3月
39821	**尻取問答(上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60900	昭和7(1932)年7月
39820	尻取問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60900	昭和7(1932)年7月
39823	尻取問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60900	昭和7(1932)年7月
39815	三休和尚(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	オリエント	60939	昭和7(1932)年8月
39813	**日支事變數へ唄(上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	オリエント	61008	昭和7(1932)年10月
13268	滑稽浪花節/どんどん節	砂川捨丸・加藤瀧子	ニットー	871	大正12(1923)年7月
13378	新磯節/鴨緑江節	砂川捨丸・加藤瀧子	ニットー	907	大正12(1923)年8月
47181	**景気のよい話(上)(下)**	砂川捨丸	ヒコーキ	70067	昭和4(1929)年11月
47184	景気のよい話(上)(下)	砂川捨丸	ヒコーキ	70067	昭和4(1929)年11月
39851	よろずまじない(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	ヒコーキ	70083	昭和4(1929)年12月
39814	**のぞき（不如帰）(上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	ヒコーキ	70397	昭和6(1931)年3月
42007	のぞき（不如帰）(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	ヒコーキ	70397	昭和6(1931)年3月
39862	よろずまじない(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65340	昭和8(1933)年1月
39812	**なにやかや節/深川くづし**	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65343	昭和8(1933)年1月
39755	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65345	昭和8(1933)年1月
39757	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65345	昭和8(1933)年1月
39791	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65345	昭和8(1933)年1月
39793	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65345	昭和8(1933)年1月
39795	即席問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65345	昭和8(1933)年1月
39849	**数へ唄 商売屋の娘（上)(下)**	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65347	昭和8(1933)年1月
39846	数へ唄 商売屋の娘（上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65347	昭和8(1933)年1月
39838	物売の掛声/唄もの色々	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65348	昭和8(1933)年1月
39798	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
39801	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
39803	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月

39805	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
39809	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
42009	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
42051	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
60675	不如帰(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65349	昭和8(1933)年1月
39832	名物俚謡行進曲 (上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65354	昭和8(1933)年1月
39834	名物俚謡行進曲 (上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65354	昭和8(1933)年1月
39769	月形半平太(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65355	昭和8(1933)年1月
39836	須磨の仇浪/替唄ふきよせ	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65356	昭和8(1933)年1月
39797	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39800	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39802	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39804	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39806	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39808	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39810	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
39811	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
42031	冥途旅行/此世の説教	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65358	昭和8(1933)年1月
42010	今昔数へ唄(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65359	昭和8(1933)年1月
39794	干支万才 (上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65360	昭和8(1933)年1月
44543	出鱈目演説/しんしんづくし	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65362	昭和8(1933)年1月
39847	数へ唄 筈がない (上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65365	昭和8(1933)年1月
27168	数へ唄 筈がない (上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65365	昭和8(1933)年1月
39822	尻取問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65366	昭和8(1933)年1月
39816	三休和尚(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65367	昭和8(1933)年1月
41757	ラッパ甚句(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65369	昭和8(1933)年1月
39841	疱瘡局(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65718	昭和8(1933)年1月
39842	疱瘡局(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65718	昭和8(1933)年1月
39843	疱瘡局(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65718	昭和8(1933)年1月
39850	金と髪(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65719	昭和8(1933)年1月
39859	老稚園(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65757	昭和8(1933)年2月
39857	老稚園(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65757	昭和8(1933)年2月
46998	あきらめ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	65842	昭和8(1933)年4月
33902	レコードホルダー(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66017	昭和8(1933)年8月
39856	レコードホルダー(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66017	昭和8(1933)年8月
39766	男女四分六(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66065	昭和8(1933)年9月
39826	蟲づくし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66168	昭和8(1933)年11月
39828	蟲づくし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66168	昭和8(1933)年11月
42076	蟲づくし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66168	昭和8(1933)年11月
41842	火事と羊羹(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66204	昭和8(1933)年12月
39746	太夫の穴/捨丸の満蒙土産	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66241	昭和9(1934)年1月
39744	太夫の穴/捨丸の満蒙土産	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66241	昭和9(1934)年1月
39748	太夫の穴/捨丸の満蒙土産	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66241	昭和9(1934)年1月
39781	大阪舌栗毛(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66286	昭和9(1934)年2月
60671	大阪舌栗毛(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66286	昭和9(1934)年2月
39863	ヨロ養老保険(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66477	昭和9(1934)年7月
39782	捨丸小原良節(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66567	昭和9(1934)年9月
33457	捨丸小原良節(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66567	昭和9(1934)年9月
39743	捨丸小原良節(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66567	昭和9(1934)年9月
39778	捨丸小原良節(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66567	昭和9(1934)年9月
39780	捨丸小原良節(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66567	昭和9(1934)年9月
42029	捨丸小原良節(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66567	昭和9(1934)年9月
35744	こんな具合に(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66613	昭和9(1934)年10月
39848	數へ唄 忠孝(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66754	昭和10(1935)年1月
39839	芋の説教/春雨（替唄）	砂川捨丸・中村春代	リーガル	66862	昭和10(1935)年3月
39741	捨丸おけさくづし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67135	昭和10(1935)年8月
41760	捨丸おけさくづし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67135	昭和10(1935)年8月
39786	磯節ナンセンス/滑稽河内音頭	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67203	昭和10(1935)年9月
39745	捨丸の別府地獄めぐり(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67219	昭和10(1935)年10月
39747	捨丸の別府地獄めぐり(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67219	昭和10(1935)年10月

39855	ゆるしてネ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67306	昭和10(1935)年11月
46999	ゆるしてネ(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67306	昭和10(1935)年11月
39854	縣々づくし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67358	昭和10(1935)年12月
39852	縣々づくし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67358	昭和10(1935)年12月
39783	ありやこりや問答(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67429	昭和11(1936)年1月
39853	夕日は落ちて(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67591	昭和11(1936)年4月
39824	民謡飛行(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67647	昭和11(1936)年5月
39772	デパート珍景(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67827	昭和11(1936)年8月
39773	デパート珍景(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67827	昭和11(1936)年8月
39831	デパート珍景(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	67827	昭和11(1936)年8月
33466	スポーツマン(上)(下)	砂川捨丸・橘家久栄	リーガル	67940	昭和11(1936)年10月
47192	スポーツマン(上)(下)	砂川捨丸・橘家久栄	リーガル	67940	昭和11(1936)年10月
13365	心臓が強い(上)(下)	砂川捨丸・荒川歌江	リーガル	68154	昭和12(1937)年2月
6031	いろは行進曲(上)(下)	砂川捨丸・荒川歌江	リーガル	68264	昭和12(1937)年4月
44548	いろは行進曲(上)(下)	砂川捨丸・荒川歌江	リーガル	68264	昭和12(1937)年4月
6783	バイバイづくし(上)(下)	砂川捨丸・荒川歌江	リーガル	68441	昭和12(1937)年7月
9128	捨丸の出征(上)(下)	砂川捨丸・荒川歌江	リーガル	68696	昭和12(1937)年12月
39825	進軍の歌(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	68859	昭和13(1938)年3月
39827	進軍の歌(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	68859	昭和13(1938)年3月
39749	捨丸の東雲ぶし(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	69248	昭和13(1938)年11月
42090	愛馬進軍歌(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	69645	昭和14(1939)年11月
39833	素晴らしい金儲け(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	69687	昭和15(1939)年1月
39787	唄と薬屋(上)(下)	砂川捨丸・中村春代	リーガル	150020	昭和15(1940)年5月

上方演芸の殿堂入り名人 特別展

「生誕100周年 追悼 ミヤコ蝶々展」展示資料の紹介

大西　律子(上方演芸資料館学芸員)

(１)はじめに

令和２年度は展示における新たな試みとして、特別展が始まった。

この特別展は、上方演芸全般の資料を展示する常設展示・企画展示とは異なり、一人(一組)の演者さんに焦点をあて、その芸や功績から上方演芸の魅力をご紹介する展示である。

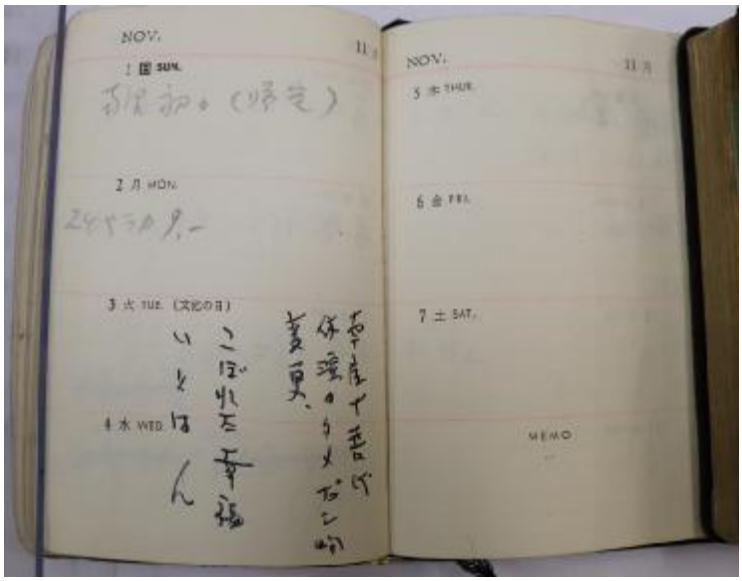
記念すべき第１回の特別展は、令和２(2020)年に生誕100年・没後20年を迎えたミヤコ蝶々にまつわる展示、「上方演芸の殿堂入り名人 特別展『生誕100周年 追悼 ミヤコ蝶々展』」。

今回はこの特別展の展示資料とあわせて、その調査中の発見についてご紹介したいと思う。

(２)展示資料の紹介と、資料にまつわる発見

「生誕100周年 追悼 ミヤコ蝶々展」では、当館収蔵資料のほか、ミヤコ蝶々保存会および個人の所蔵資料を展示していた。展示にあたってお借りした資料は、勲章・賞状・トロフィーや「漫才学校」の台本をはじめ、そのどれもが貴重なものばかりである。そのなかから、ミヤコ蝶々のスケジュール帳と公演パンフレットをとりあげることにしたい。

①ミヤコ蝶々のスケジュール帳（昭和39(1964)年、所蔵・協力：ミヤコ蝶々保存会）(図①)



〔図①〕1964(昭和 39)年 11 月 1 日～7 日のページを開いた写真

②パンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』

(京都・四条南座 昭和39(1964)年11月、資料コード：00314872、協力：松竹株式会社) (図②)

③パンフレット『コマ・喜劇』

(梅田コマ・スタジアム 昭和39(1964)年12月、資料コード：00458000、協力：梅田芸術劇場) (図③)

〔図②〕

〔図③〕

まず、スケジュール帳はミヤコ蝶々保存会所蔵の資料。大きさはほぼ手のひらサイズで、昭和34(1959)年から昭和48(1973)年まで残されている(昭和47(1972)年はなし)。スケジュール帳の中面には、公演日や稽古日・収録日といったさまざまな予定が書きこまれている。

そして、公演パンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』と『コマ・喜劇』は当館の所蔵品で、いずれもＢ５サイズ。中には出演者の写真や人物紹介・芝居のあらすじなどが掲載されている。

特別展では、スケジュール帳とその書き込み部分、そして書き込みの日付に一致する公演パンフレットを合わせて展示していた(図④)。

〔図④〕左上:パンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』 左下: 昭和 39(1964)年のスケジュール帳

そして、この展示作業中に思いがけない事実と遭遇した。それは、芝居の主要キャストの急病による休演と、それにともなう演目の変更。公演パンフレットに記載された演目と、実際に演じられた演目とは違っていたかもしれないということである。

そのきっかけは、個々のパンフレットを確認していたときに見つけた文面だった。

昭和39(1964)年12月公演『コマ・喜劇』パンフレット内の「出演者の素顔」によると、同年11月に京都の南座で行われた松竹家庭劇は、曽我廼家十吾が急病のため休演となり、演目が変更されたとの記載があった。以下に、その内容を引用する。

「十一月、京都南座の松竹家庭劇に特別参加したミヤコ蝶々は一座の女神だった。初日前に座頭の曽我廼家十吾が急病休演してしまい予定されていた十吾・蝶々の共演どころか、幕があけられるか、どうかといったところまで追いつめられていたところを、蝶々をシンとして千秋楽まで大入りをつづけられたからだ。」(1)

「出演者の素顔」では、座長の十吾が休演するという緊急事態のなか、一座の中心をつとめて公演を成功に導いた功労者として蝶々を紹介し、その人柄や芸についても述べられている。

そこで、昭和39(1964)年11月の南座『松竹家庭劇 錦秋特別公演』パンフレットとミヤコ蝶々のスケジュール帳の同年11月部分とを照合した。すると、パンフレットとスケジュール帳にはそれぞれ違う演目が記されていた。

☆パンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』にある、曽我廼家十吾・ミヤコ蝶々共演の演目
(図⑤ 左の写真)

昼の部(11時半開演) 「蝶々十吾 めおと勘定」

夜の部(４時半開演) 「十吾蝶々のお前百まで」

☆昭和39(1964)年11月１日のスケジュール帳書き込み (図①)

「南座初日(帰宅)」

☆昭和39(1964)年11月３日のスケジュール帳書き込み (図①)

「南座十吾氏休演のタメ だし物変更. こぼれた幸福 いとはん」

『コマ・喜劇』のパンフレットやスケジュール帳の書き込みから、「こぼれた幸福」「いとはん」が変更後の演目である可能性は高い。そこで、書籍や新聞・雑誌の記事および当時の報道や評判について調べてみることにした。

この「松竹家庭劇 錦秋特別公演」が京都・南座で行われた公演であることから、まずは松竹の書籍『松竹百年史 演劇資料』と『昭和の南座』を確認した。その結果、いずれの書籍にも、曽我廼家十吾が病気により休演したために演目が変わったとの文章があった。変更後の演目は、「秋晴れ珍道中」「こぼれた幸福」「蝶々のいとはん」とのことである(『松竹百年史 演劇資料』より)。

また『昭和の南座』では、雑誌『演劇界』(昭和39(1964)年12月号)に掲載されている菱田雅夫の「十吾休演さわぎ」(「関西短信」内の文章)を引用し、この演目変更がいかに大変なことであったか、当時の様子を伝えている。

この号の『演劇界』には、そのほかにも東川松治による「演劇不在の大阪劇界」と資料(日ごとの公演情報が載っている)に、十吾の休演や演目変更についての記載があった。

そして、『昭和の南座』には本冊のほかに(上)・(中)・(下)と３冊の資料編があり、資料編では南座で行われた公演について、演目・配役・作者・脚色・装置・振付といったより詳細な情報を見ることができる。

今回調べた昭和39(1964)年「松竹家庭劇 錦秋特別公演」の演目(当初の予定と、変更後のもの)やその配役は、『昭和の南座 資料編(中)』で確認することができた。また同ページには、十吾の休演と演目変更の経緯について記されている部分があった。以下に、その文章を引用する。

「十吾は初日前日、持病の座骨神経痛が悪化し、休演を申し出る。初日前徹夜で道具を取りかえ、二日目までは十吾出演予定であった昼の部『めおと勘定』、夜の部『お前百までは』を蝶々主演の『いとはん』に変更。三日以降から別狂言に変わり、昼夜同じ出し物となる。」(2)

これらの資料により、昭和39(1964)年11月の「松竹家庭劇 錦秋特別公演」でミヤコ蝶々が出演したのは「こぼれた幸福」と「蝶々のいとはん」の２演目であることが判明した。この事実は、蝶々のスケジュール帳の昭和39(1964)年11月３日欄に書きこまれた内容とも一致している。

演目の変更とその経緯がわかったところで疑問が残るのは、緊急事態とはいえ、なぜ一座が急遽、当初と違う演目の「秋晴れ珍道中」「こぼれた幸福」「蝶々のいとはん」を演じることができたのかということである。

そこで『松竹百年史 演劇資料』から、この３つの演目の上演履歴を調べてみることにした。すると、どの演目も過去に演じられたものであることがわかった。

・「秋晴れ珍道中」　… 昭和39(1964)年の10月に道頓堀の朝日座で上演
・「こぼれた幸福」　… 昭和37(1962)年の８月に大阪新歌舞伎座で上演
・「蝶々のいとはん」… 昭和39(1964)年１月に道頓堀の朝日座、８月に名古屋の御園座で上演

たとえ今までに上演したことのある芝居だとしても、数年から１か月前に上演したものを急に演じるのは、相当に難しいことであると思われる。しかしこの状況下で、「松竹家庭劇 錦秋特別公演」は連日大入りのうちに千秋楽を迎えられたという。これは、驚くべきことではないだろうか。

次に、当時の報道や演目変更後の評判についても調べてみた。人気のある公演についての出来事ならば、現代と同様に、新聞やニュースで報じられているのではと考えてのことである。その結果、『朝日新聞』と『京都新聞』に記事が見つかった。

昭和 39(1964)年 11 月３日付けの『朝日新聞』(大阪版・夕刊) の４面には、曽我廼家十吾が急性リウマチにより休演、「だしものは『みょうと勘定』と『お前百まで』が蝶々主演の『蝶々のいとはん』と『こぼれた幸福』に変った」(3) と記されている。

そして、昭和 39(1964)年 11 月７日の『京都新聞』には、演目変更後の評判が掲載されていたそうである(これは『昭和の南座 資料編(中)』に引用掲載されていたもの)。

それによると、十吾の病気休演のために十吾・蝶々の共演はなくなったものの、新しい演目では蝶々や南都雄二・石井均ら家庭劇のキャストが活躍し、「さほどアナを感じさせない」[4] とのこと。そして「こぼれた幸福」では、蝶々の人間性の温かさや深みがその台詞に反映されていると称えられている。

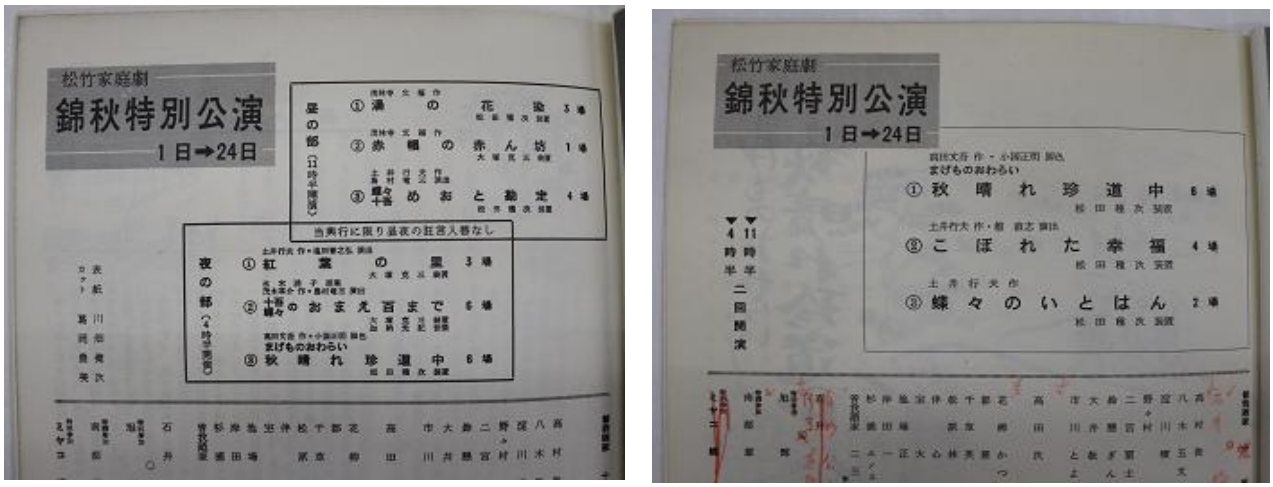
また、当館では展示資料のほかにも同じ『松竹家庭劇 錦秋特別公演』のパンフレットを２冊所蔵しており、改めてその内容を確認してみたところ、ここでも新たな発見があった。

☆資料コード：00457630 **のパンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』**

→ 表紙・演目・総ページ数ともに資料コード：00314872 のパンフレット(図②・図⑤)と同じ(総ページ数は 24 ページ、切り取り部分が多数ある)。

☆資料コード：00457622 **のパンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』**(図⑤ 右の写真)

→ 表紙は同一、総ページ数は 20 ページ。演目は「秋晴れ珍道中」「こぼれた幸福」「蝶々のいとはん」。写真や配役の部分に、赤鉛筆による書き込みがある。



〔図⑤〕『松竹家庭劇 錦秋特別公演』演目部分 左が十吾休演前(資料コード:00314872)、右が演目変更後(資料コード:00457622)

資料コード：00457622 のパンフレット『松竹家庭劇 錦秋特別公演』には、図⑤の写真以外の箇所にも赤鉛筆の書き込みがあり、演目変更後のパンフレットの校正版ではないかと思われる(現時点では、その裏付けとなる資料は見つかっていない)。

なお、パンフレットの印刷日や発行日は３冊ともに同じ日付(印刷日は 10 月 31 日、発行日は 11 月１日)となっている。

今後演目変更後のパンフレットが見つかり、その内容を確認できる機会があれば、ぜひ見比べてみたいと思っている。

(３)おわりに

ご紹介した「松竹家庭劇 錦秋特別公演」の演目変更は、ひとつの資料だけではなく、複数の資料を合わせて調べることによって知ることができたものである。

ミヤコ蝶々のスケジュール帳からパンフレット、そして書籍・新聞へと、さまざまな資料をたどっていくことで当時の様子が明らかになっていった。またそれにより、ミヤコ蝶々という人物の魅力や才能と、その芸のすばらしさにもふれることができた。

一般的に、どんなによく知られた出来事であっても、時代が進むにつれて人々の記憶からは薄れていくと言われている。しかし、資料を残しそれを伝えることで、当時の記憶をとどめてゆくことができる。今回の展示で、資料を保存・継承していくことの大切さを改めて実感した。

この「生誕 100 周年 追悼 ミヤコ蝶々展」の開催に際しては、コロナ禍の最中でありながらも関係各所からは多大なご協力を賜り、そして、多くの方々が今展示をご覧くださった。この場をお借りして、厚く御礼申しあげます。

【註】

（１）パンフレット『コマ・喜劇』昭和 39(1964)年 12 月、p.18

（２）松竹『昭和の南座 資料編(中)』平成４(1992)年、p.564

（３）朝日新聞 大阪版 昭和 39(1964)年 11 月３日夕刊 ４面

（４）松竹『昭和の南座 資料編(中)』平成４(1992)年、p.564

＜参考文献＞

『朝日新聞』大阪版 昭和 39(1964)年 11 月３日夕刊

『演劇界』22 巻 13 号(昭和 39(1964)年 12 月号)

『昭和の南座』、松竹、平成３(1991)年 10 月

『昭和の南座 資料編(中)』、松竹、平成４(1992)年５月

『松竹百年史 演劇資料』、松竹、平成８(1996)年 11 月

収蔵資料紹介（資料整理の現場から）

三代目桂米紫旧蔵資料の紹介

島田　智子（上方演芸資料館司書）

令和元(2019)年、三代目桂米紫師のご遺族より錦影絵の道具と演芸関係の紙資料を寄贈したいとのお話をいただいた。前者は昭和 46(1971)年ごろに初代桂南天師より米紫師に託されたとの由来があるもので、上方演芸の貴重な財産として資料館で大切に保管するのもひとつではあるが、演者さんの元に置いて活用いただく方がよりよいだろうとのことから、錦影絵の風呂（木製の幻灯機）や種板（絵が描かれたガラス板がはめこまれた横長の板）を受け継いでいる米朝事務所に引き取られることになり、当館には後者の紙資料 80 点が寄贈された。

80 点の内訳は、大半が千日劇場のプログラムで 65 点（本号の表紙の写真）、京都花月劇場５点、その他 10 点である。月日や曜日は明記されていても何年のものか不明なものが多かったが、図書や新聞広告などを調査した結果、昭和 40 年前後に集中しており、最も古いものは昭和 33(1958)年 10 月、最も新しいものは昭和 41(1966)年 11 月であることがわかった。資料登録作業が完了したため、一覧を次に示す。

No.	タイトル	時期・出版年	主催・興行主等	場所・会場	大きさ	資料コード
1	千日劇場　正月 下席21日-31日	1963(S.38).1.21～31	千土地興行　芸能課	千日劇場	17.6×38cm	00659524
2	千日劇場　7月 中席11日-20日	[1963(S.38)].7.11～20	千土地興行　芸能課	千日劇場	17.6×38.4 cm	00659557
3	千日劇場　8月 上席1日-10日	[1963(S.38)].8.1～10	日本ドリーム観光芸能課	千日劇場	17.3×38cm	00659565
4	千日劇場　9月 中席11日-20日	[1963(S.38)].9.11～20	日本ドリーム観光芸能課	千日劇場	17.5×38.2cm	00659573
5	千日劇場　10月 中席11日-20日 秋の東西競演会	[1963(S.38)].10.11～20	日本ドリーム観光芸能課	千日劇場	17.5×38cm	00659581
6	千日劇場　10月 下席21日-31日	[1963(S.38)].10.21～31	日本ドリーム観光芸能課	千日劇場	17.6×38.1cm	00659631
7	千日劇場　12月 中席11日-20日	[1963(S.38)].12.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38.2cm	00660241
8	千日劇場　1月 中席11日-20日	[1964(S.39)].1.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38cm	00659649
9	千日劇場　1月 下席21日-31日	[1964(S.39)].1.21～31	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.6×38cm	00659656
10	千日劇場　2月 上席1日-10日	[1964(S.39)].2.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.6×38.3cm	00659672
11	千日劇場　2月 中席11日-20日	[1964(S.39)].2.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38cm	00659680
12	千日劇場　2月 下席21日-29日	[1964(S.39)].2.21～29	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.7×38.1cm	00659698
13	千日劇場　3月 上席1日-10日	[1964(S.39)].3.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.3×38.2cm	00659755
14	千日劇場　3月 中席11日-20日	[1964(S.39)].3.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38.3cm	00659763
15	千日劇場　3月 下席21日-31日	[1964(S.39)].3.21～31	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.6×38cm	00659789
16	千日劇場　4月 上席1日-10日	[1964(S.39)].4.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.7×38cm	00659797
17	千日劇場　5月 上席1日-10日 新緑公演東西競演会	[1964(S.39)].5.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.7×38cm	00659813
18	千日劇場　5月 中席11日-20日	[1964(S.39)].5.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.6×37.8cm	00659821
19	千日劇場　5月 下席21日-31日	[1964(S.39)].5.21～31	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.9×38.1cm	00659839
20	千日劇場　6月 上席1日-10日	[1964(S.39)].6.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.7×38cm	00659847
21	千日劇場　6月 中席11日-20日	[1964(S.39)].6.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38.1cm	00659854
22	千日劇場　7月 上席1日-10日	[1964(S.39)].7.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.6×38.5cm	00660258
23	千日劇場　7月 中席11日-20日	[1964(S.39)].7.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.7×37.9cm	00660266
24	千日劇場　7月 下席21日-31日	[1964(S.39)].7.21～31	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.4×37.9cm	00660274

No.	タイトル	時期・出版年	主催・興行主等	場所・会場	大きさ	資料コード
25	千日劇場　8月 上席1日-10日	[1964(S.39)].8.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.4×38.3cm	00660282
26	千日劇場　8月 下席21日-31日	[1964(S.39)].8.21～31	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38.3cm	00659862
27	千日劇場　9月 上席1日-10日	[1964(S.39)].9.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.4×38.3cm	00659870
28	千日劇場　9月 中席11日-20日	[1964(S.39)].9.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.8×38.2cm	00659888
29	千日劇場　9月 下席21日-30日	[1964(S.39)].9.21～30	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38cm	00659896
30	千日劇場　10月 上席1日-10日 お笑いオリンピック大会	[1964(S.39)].10.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.3×38.5cm	00659904
31	千日劇場　10月 中席11日-20日	[1964(S.39)].10.11～20	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	18×38.5cm	00659938
32	千日劇場　10月 下席21日-31日	[1964(S.39)].10.21～31	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38.3cm	00659946
33	千日劇場　11月 上席1日-10日	[1964(S.39)].11.1～10	日本ドリーム観光株式会社 大阪営業所　芸能課	千日劇場	17.5×38.2cm	00659953
34	千日劇場　1月 中席11日-20日	[1965(S.40)].1.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.5×38.3cm	00659961
35	千日劇場　2月 中席11日-20日	[1965(S.40)].2.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.2cm	00659987
36	千日劇場　2月 下席21日-28日	[1965(S.40)].2.21～28	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.8×38.8cm	00660019
37	千日劇場　3月 上席1日-10日	[1965(S.40)].3.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.8×38.8cm	00659995
38	千日劇場　3月 中席11日-20日	[1965(S.40)].3.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.2cm	00660027
39	千日劇場　3月 下席21日-31日	[1965(S.40)].3.21～31	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.2cm	00660035
40	千日劇場　4月 上席1日-10日 京唄子全快記念興行	[1965(S.40)].4.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.2cm	00660043
41	千日劇場　4月 中席11日-20日	[1965(S.40)].4.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.4×38.5cm	00660050
42	千日劇場　4月 下席21日-30日	[1965(S.40)].4.21～30	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.3×38.4cm	00660068
43	千日劇場　5月 1日-10日 恒例五月名人会	[1965(S.40)].5.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.7×38.6cm	00660084
44	千日劇場　5月 1日-10日 恒例五月名人会	[1965(S.40)].5.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.5cm	00660092
45	千日劇場　5月 中席11日-20日	[1965(S.40)].5.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.7cm	00660100
46	千日劇場　5月 下席21日-31日	[1965(S.40)].5.21～30	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.2×38.6cm	00660118
47	千日劇場　6月 上席1日-10日	[1965(S.40)].6.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.5×38.6cm	00660126
48	千日劇場　6月 下席21日-30日	[1965(S.40)].6.21～30	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.5×38.6cm	00660134
49	千日劇場　7月 上席	[1965(S.40)].7.[1～10]	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.5×38.3cm	00660142
50	千日劇場　8月 中席11日-20日 笑いのお盆特別興行	[1965(S.40)].8.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.4cm	00660159
51	千日劇場　9月 中席11日-20日	[1965(S.40)].9.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.4cm	00660167
52	千日劇場　9月 下席21日-30日	[1965(S.40)].9.21～30	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.5cm	00660175
53	千日劇場　10月 上席1日-10日 秋の千劇まつり	[1965(S.40)].10.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38cm	00660183
54	千日劇場　10月 中席11日-20日 秋の千劇まつり	[1965(S.40)].10.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.4×38.3cm	00660191
55	千日劇場　10月 下席21日-31日 秋の千劇まつり（10月31日のみ千劇浪曲名人会）	[1965(S.40)].10.21～31	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.5×38.5cm	00660209
56	千日劇場　11月 上席1日-10日	[1965(S.40)].11.1～10	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.5×38.6cm	00660217
57	千日劇場　11月 中席11日-20日	[1965(S.40)].11.11～20	日本ドリーム観光株式会社 営業部　芸能課	千日劇場	17.6×38.6cm	00660225
58	千日劇場　11月 下席21日 - 30日	[1965(S.40)].11.21～30	日本ドリーム観光株式会社 芸能企画制作室	千日劇場	17.4×38.8cm	00660233
59	千日劇場　1月 中席11日-20日	[1966(S.41)].1.11～20	日本ドリーム観光株式会社 芸能企画制作室	千日劇場	17.7×38.6cm	00660290
60	千日劇場　5月 中席11日-20日	[1966(S.41)].5.11～20	日本ドリーム観光株式会社 芸能企画制作室	千日劇場	17.9×38.6cm	00660308
61	千日劇場　6月 上席1日-10日	[1966(S.41)].6.1～10	日本ドリーム観光株式会社 芸能企画制作室	千日劇場	17.9×38.6cm	00660316
62	千日劇場　6月 中席11日-20日	[1966(S.41)].6.11～20	千日興行株式会社　制作室	千日劇場	17.8×38.7cm	00660324
63	千日劇場　7月 上席1日-10日 柳家三亀松第4回芸術祭奨励賞受賞記念大阪公演	[1966(S.41)].7.1～20	千日興行ＫＫ会社　製作課	千日劇場	18.1×38.6cm	00660332
64	千日劇場　9月 中席11日-20日	[1966(S.41)].9.11～20	千日興行株式会社　製作課	千日劇場	17.9×38.6cm	00660340
65	千日劇場　10月 中席11日-20日	[1966(S.41)].10.11～20	千日興行株式会社　製作課	千日劇場	17.8×38.2cm	00660357
66	京都花月劇場　№45	1963(S.38).8.21～28	吉本興業株式会社	京都花月劇場	19.2×17.2cm （二つ折り）	00659607
67	京都花月劇場　№125	1965(S.40).11.11～20	吉本興業株式会社	京都花月劇場	19.1×17.8cm （二つ折り）	00659615
68	京都花月劇場　№155	1966(S.41).9.11～20	吉本興業株式会社	京都花月劇場	19.3×17.6cm （二つ折り）	00659623
69	京都花月劇場　№156	1966(S.41).9.21～30	吉本興業株式会社	京都花月劇場	19×17.5cm （二つ折り）	00659664
70	京都花月劇場　№162	1966(S.41).11.21～30	吉本興業株式会社	京都花月劇場	19×17.6cm （二つ折り）	00659706

No.	タイトル	時期・出版年	主催・興行主等	場所・会場	大きさ	資料コード
71	第73回 落語土曜寄席	[1958(S.33)].10.25	主催：上方落語協会	文楽座　別館4階	18.1×26.1cm	00659912
72	第75回 落語土曜寄席	[1958(S.33)].11.8	主催：上方落語協会	文楽別館	18.2×26.1cm	00659920
73	〔ＮＨＫ 上方落語研究会 案内状〕（2枚組）	[1962(S.37)].8.20	[上方落語研究会]	大阪中央放送局 3階第1会議室	25.7×18.2cm （2枚組）	00660076
74	ＮＨＫ 上方落語の会（第18回） 昭和37年度 大阪府芸術祭参加	1962(S.37).10.22		日立サルーン	13.4×18.9cm （二つ折り）	00659730
75	三越上方噺の会（落語新人会）	[1966(S.41)].5.7		三越劇場	13.5×19.4cm	00659979
76	三越上方噺の会（落語新人会）	[1966(S.41)].11.8		三越劇場	13.4×19.3cm	00660001
77	第110回 納涼　三越落語会	1966(S.41).8.15	主催：上方落語協会	三越劇場	17.3×19.6cm	00659771
78	第11回　落語研究会	[1960(S.35)].11.3	主催：［関西学院大学］古典芸能研究部	[関西学院大学] 学生会館ホール	25.5×17.6cm （二つ折り）	00659599
79	なんでもやろう 実験寄席　005結成	1965(S.40).5.14	005連絡所	自安寺	13.5×18.8cm （二つ折り）	00659748
80	第32回　上方落語をきく会	[1966(S.41)].10.14	主催：朝日放送	ＡＢＣホール	17.5×19.5cm （二つ折り）	00659805

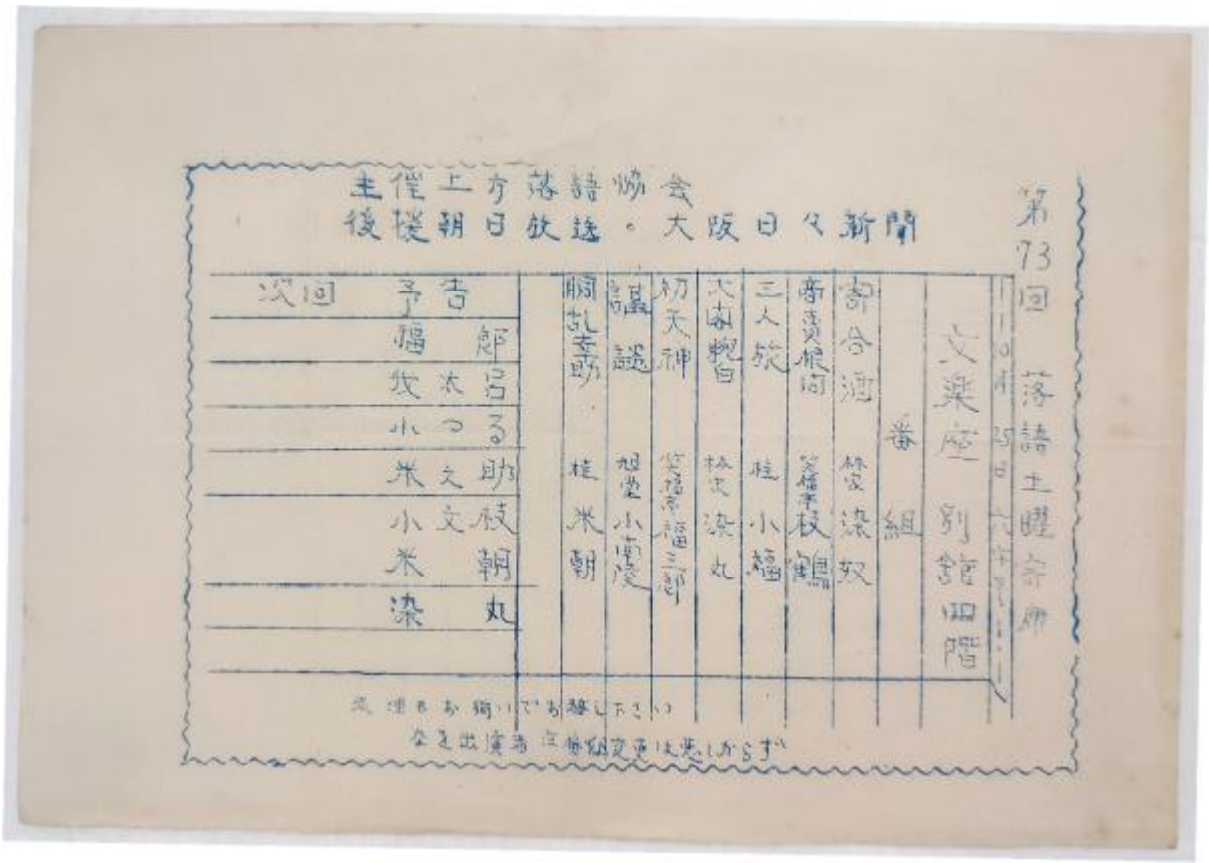
これらの資料のかつての所蔵者 三代目桂米紫師は昭和２(1927)年生まれ。昭和 22(1947)年に松鶴家団之助師に入門、藤野団楽の名で漫才、のち斉田憲志の名で腹話術、昭和 33(1958)年に三代目桂米朝師に入門してけんじ、翌年米紫に改名したとされている[1]。平成７(1995)年没。

寄贈いただいた 80 点のなかで名前が確認できるのは、「桂米紫」28 点、「桂けんじ」１点（№78）、「斉田憲志」１点（№42）で[2]「藤野団楽」は見当たらなかった。

最後に、米紫師は出演していないが、80 点中最も古いプログラムを紹介する。

「第 73 回　落語土曜寄席」［昭和 33(1958)年］10 月 25 日（一覧№71）

主催：上方落語協会、後援：朝日放送・大阪日々新聞



わら半紙に藍色インクでガリ版印刷

落語土曜寄席は昭和 32(1957)年５月４日、道頓堀文楽座別館にて第１回が開催され、昭和34(1959)年末まで続いた[3]。こちらの資料に年は書かれていないが、10 月 25 日が土曜日であることなどから、昭和 33(1958)年のものと推定される。

この回の演者と演目を、改名の時期を中心に出演順に紹介すると次のとおり。

〇「寄合酒」林家染奴

のちの月亭可朝。昭和 33(1958)年、三代目林家染丸に入門し染奴。その後、三代目桂米朝の下で二代目小米朝となった[4]。昭和 43(1968)年に月亭可朝に改名。

〇「商売根問」笑福亭枝鶴

四代目。のちの六代目松鶴。昭和 28(1953)年に三代目染丸と同時襲名披露をおこない、三代目光鶴から四代目枝鶴になった。昭和 37(1962)年、道頓堀角座で六代目松鶴を襲名[5]。

〇「三人旅」桂小福

『古今東西落語家事典』によれば、二代目桂福団治（のちの三代目春団治）に入門し、小福から春朝を名乗り、のちに廃業したとのことである[6]。

〇「太閤腕白」林家染丸

三代目。前年の昭和 32(1957)年４月に結成した上方落語協会の初代会長。

〇「初天神」笑福亭福三郎

昭和 29(1954)年 12 月に文の家かしくに入門し速達。昭和 30 年、かしくの三代目笑福亭福松襲名にともない福三郎と改めたが、廃業した[7]。

〇講談　旭堂小南陵

二代目。のちの三代目南陵。二代目南陵の実子で、昭和８(1933)年に父に入門し南海。昭和15(1940)年に二代目小南陵となり、昭和 41(1966)年に三代目南陵を襲名[8]。

〇「胴乱幸助」桂米朝

三代目。重要無形文化財保持者（人間国宝）。昭和 22(1947)年、四代目桂米団治に入門。桂三木助を襲名する話もあったが実現しなかった[9]。

その他各資料の詳しい情報は当館webサイトに掲載する予定である。今後も資料の寄贈があれば速やかに整理作業をおこない、紹介していきたい。

【註】

（１）相羽秋夫『現代上方演芸人名鑑』少年社、昭和 55(1980)年、p.69
諸芸懇話会・大阪芸能懇話会編『古今東西落語家事典』平凡社、平成元(1989)年、p.363
倉田喜弘・藤波隆之編著『日本芸能人名事典』三省堂、平成７(1995)年、p.235 など。
一方、昭和 36(1961)年１月発行の花月亭九里丸編『九里丸置土産 笑根系図』（以下、『笑根系図』と略す）には「桂けんじ」で掲載されている。『笑根系図』の凡例によると、もととなる演芸人へのアンケート調査は前年の昭和 35(1960)年８月。
また、当館はアンケート用紙を綴じた『笑魂系図回答綴』（以下、『回答綴』）も所蔵しており、そちらの表紙には「昭和 35 年６月」と書かれている。アンケートで本人は、「あなたの芸名」欄に「桂けんじ」、「あなたの師匠　現在おいくつですか」の問

いに「桂米朝 36 才 数え年」と回答している（師匠についての問いには松鶴家団之助の名も挙げている）。大正 14(1925)年生まれの米朝が数えで 36 才の年は昭和 35(1960)年であり、『回答綴』表紙の記載と一致する。

つまり、少なくとも昭和 35(1960)年の途中まではまだ「けんじ」であったと考えられ、「米紫」になった時期は 35 年以降ではないだろうか。一覧№78「落語研究会」に「桂けんじ」で出演していることとも矛盾しない。

（２）昭和 40(1965)年のプログラムなので、同姓同名の別人である可能性は否定できない。ただ、落語ではなく「センニチコメディ」のなかの刑事という役柄での出演であることから、昔の芸名で腹話術などを披露したのかもしれないとも考える。『回答綴』によると「斉田憲志」では漫談もしていたようである。

（３）樋口保美「戦後の上方落語年表」（『芸能懇話』第 17 号所収）、大阪芸能懇話会、平成 18(2006)年、p.54、広岡日出夫・桂文紅校閲「戦後上方落語史」５（『上方芸能』21 所収）、上方落語をきく会、昭和 46 (1971)年、p.105

（４）『現代上方演芸人名鑑』p.138、『古今東西落語家事典』p.364、『日本芸能人名事典』p.597 など。但し、可朝本人は「入門したんは五九年（筆者註：1959 年すなわち昭和 34 年）、私が二十一歳の時ですわ」と述べている（月亭可朝『真面目ちゃうちゃう　可朝の話』鹿砦社、平成 11(1999)年、p.32）。

だが、関西演芸協会の「会員大入聚」（会員名簿）で確認すると、昭和 34(1959)年１月現在のものに、師匠染丸に続いて「林家染奴」の名が掲載されている。本名が可朝のものであることから、34 年以前に入門していたことは間違いないであろう。よって、この回の落語土曜寄席に出演している「染奴」は、のちの月亭可朝と考えられる。

なお、論旨からはずれるが、米朝門下に移って「小米朝」になった時期について、昭和 35(1960)年１月現在の「会員大入聚」までは「林家染奴」、翌 36(1961)年１月現在のものには「桂小米朝」で掲載されていること、『回答綴』は「林家染奴」だが『笑根系図』では「桂小米朝」であることを申し添える。

（５）『古今東西落語家事典』p.334

（６）同 p.401「春朝」の項

先述の「会員大入聚」には、昭和 35(1960)年１月現在のものまでは「小福」、昭和 36(1961)年１月現在のものには「春朝」で掲載されている。『笑根系図』でも「春朝」なので、昭和 35 年中に春朝になったようだ。

（７）『古今東西落語家事典』p.396、p.328「三代目笑福亭福松」の項

（８）『現代上方演芸人名鑑』p.87、『日本芸能人名事典』p.318

三代目南陵襲名興行やその時に書かれた記念の額については、本号の荻田清「三代目旭堂南陵襲名記念額「寄席鍋」について」を参照されたい。

（９）桂米朝著、豊田善敬・戸田学編『桂米朝集成』第４巻、岩波書店、平成 17(2005)年、pp.45-46

【参考資料】

大阪日日新聞　昭和 39(1964)-昭和 41(1966)年

上方演芸資料館（ワッハ上方）の経緯等

【経　緯】

○　平成　元年　３月　故砂川捨丸氏の遺族から、氏が愛用された貴重な鼓を大阪府に寄贈

○　平成　２年　１月　貴重な資料の散逸を防ぎ、大阪が誇る文化遺産である「上方演芸の歴史」とともに後世に残していく必要があるとして、「上方演芸保存振興検討委員会」（会長：井上　宏　関西大学教授）を設置

○　平成　４年　３月　同委員会において「上方演芸保存振興事業基本構想」を取りまとめ、資料館の設置を提言

○　平成　５年 12 月　大阪府において、資料館の立地場所を大阪市中央区難波千日前に決定

○　平成　６年　７月　基本構想を受け、大阪府において資料館に関する基本計画を策定

○　平成　８年　３月　大阪府立上方演芸資料館条例を公布

○　　同　年　８月　3,000 を上回る一般公募の中から資料館の愛称が「ワッハ上方」に決定

○　　同　年 11 月　展示室、演芸ホール、演芸サロン・資料室、レッスンルームや収蔵庫等から構成される有料施設として、大阪府立上方演芸資料館がオープン

○　平成 20 年　２月　大阪府が「財政非常事態」を宣言し、全ての事業、出資法人及び公の施設をゼロベースで見直すこととし、資料館もその対象となる

○　平成 21 年 12 月　「大阪府戦略本部会議」において、「資料館が今後も果たすべき役割は、資料の収集・保存、資料の活用（展示・ライブラリー）、レファレンスサービスであり、「公演」「育成」は民に委ねる」との方針を決定

○　平成 22 年 12 月　演芸ホールを廃止

○　平成 25 年　１月　「大阪府戦略本部会議」において、「当面は、現地において、常設展示を縮小し、より効率的な運営を行い、無料での利用に供するとともに、巡回展示や大学との連携等による研究機能の充実など新たな展開を図る」との方針を決定

○　　同　年　４月　展示室・レッスンルームを廃止するとともに、入館を無料とする

○　平成 26 年　７月　「大阪府市文化振興会議アーツカウンシル部会」が、資料館の今後の方向性について、「大阪独自の文化である上方演芸を後世に伝えていくことは大阪府の文化行政が担うべき役割の一つであり、現時点では、資料館がその仕事を果たすことが望ましい」と提言

○　平成 27 年　４月　提言を踏まえ、資料の整理・活用を継続的かつ計画的に取り組めるよう、指定管理者による運営を改め、大阪府の直営による運営を開始

○　平成 30 年　７月　収蔵庫を大阪府咲洲庁舎に移転

○　　同　年 11 月　多くの府民や観光客等が上方演芸に触れ、楽しみながら、その魅力を知ることができる「体験型」の事業を中心に企画・運営を実施するという方針に基づき、リニューアル工事に着手

○　平成 31 年　4 月　リニューアルオープン

【機能の推移】

<table>
<tr><th></th><th colspan="2">開館～</th><th colspan="2">平成 23 年 4 月～
（縮小）</th><th colspan="2">平成 25 年 4 月～
（縮小・無料化）</th><th colspan="2">平成 31 年 4 月～
（全面リニューアル）</th></tr>
<tr><th>場所</th><th>区分</th><th>面積(㎡)</th><th>区分</th><th>面積(㎡)</th><th>区分</th><th>面積(㎡)</th><th>区分</th><th>面積(㎡)</th></tr>
<tr><td rowspan="3">4
階</td><td colspan="2">展示室</td><td>1,170.991</td><td rowspan="3">存置</td><td rowspan="3">同　左</td><td colspan="4" rowspan="3">廃　止
※1</td></tr>
<tr><td>演芸ﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ</td><td>150.0
（15 ブース）</td></tr>
<tr><td>小演芸場
[上方亭]
（有料）</td><td>98.44
（74 席）</td></tr>
<tr><td>5
階</td><td colspan="2">演芸ホール
（有料）</td><td>1,484.34</td><td colspan="6">廃　止
※2</td></tr>
<tr><td>6
階</td><td colspan="2">事務室</td><td>326.705</td><td>存置</td><td>同左</td><td colspan="4">廃　止</td></tr>
<tr><td rowspan="3">7
階</td><td>ﾚｯｽﾝﾙｰﾑ
（有料）</td><td>99.85
（60 席）</td><td rowspan="3">存置</td><td rowspan="3">同左</td><td>（改修）
※3</td><td>同左</td><td>（改修）
常設展示エリア・
視聴ブース
（５ブース）</td><td>99.500</td></tr>
<tr><td>収蔵庫</td><td>260.00</td><td>存置</td><td>同左</td><td>（改修）
企画展示エリア・
演芸ステージ・
体験エリア・
エンディング通路
（事務室含む）</td><td>305.750</td></tr>
<tr><td>共用部分</td><td>250.093</td><td>存置</td><td>同左</td><td>（改修）</td><td>204.693</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2">合　　計</td><td>3,591.979</td><td></td><td>2,107.639</td><td></td><td>609.943</td><td></td><td>609.943</td></tr>
</table>

※1　ライブラリーは、9 ブースに縮小のうえ 7 階へ移設

※2　平成 22 年 12 月に演芸ホールを廃止

※3　レッスンルーム（有料）を廃止のうえ、ライブラリー(9 ブース)及び事務室に改修

【管理運営】

期　　間	管　理　運　営	備　　考
開　館　　～平成 14 年　３月	(財)大阪府文化振興財団	管理運営委託
平成 14 年４月～平成 18 年　３月	大 阪 府	直営
平成 18 年４月～平成 22 年 12 月	（ＮＰＯ）ニューウエーブ日東大阪	指定管理
平成 23 年１月～平成 23 年　３月	大 阪 府	直営（休館）
平成 23 年４月～平成 27 年　３月	吉本興業グループ	指定管理
平成 27 年４月～	大 阪 府	直営

【歴代館長】

期　　間	歴　代　館　長　名
平成　８年 11 月　～	狛林　利男
平成 11 年　４月～	井上　　宏
平成 14 年　４月～	有川　　寛
平成 18 年　４月～	伊東　雄三
平成 23 年　１月～	★大阪府直営＜休館＞
平成 23 年　４月～	河井　　泉
平成 25 年　４月～	井上　　明
平成 26 年　４月～	田中　宏幸
平成 27 年　４月～	★大阪府直営

大阪府立上方演芸資料館　令和２年度年報

編集・発行　大阪府立上方演芸資料館
〒542-0075　大阪市中央区難波千日前 12-7
ＹＥＳ・ＮＡＭＢＡビル７階
TEL：06-6631-0884
令和３年 11 月発行